
戦うコックさんの弟子ケンイチ

W a i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦うコックさんの弟子ケンイチ

【Nコード】

N8788S

【作者名】

W a i

【あらすじ】

少年は幼い頃、心に深い傷を負い、塞ぎ混んでいた。だが、少年は1人の男に出会い、武術を学んだ。

少年は1つの夢と将来の目標を見つけ、走り出した。

そして、高校に入学して1ヶ月が過ぎた頃、まるで風を切る羽のような少女に出会う……

2人の運命が交差する時、物語は始まる。

BATTLE 1 (前書き)

どうも、Waiです。小説三作目でございます。

私の好きな漫画第一位の二次創作です。

主人公改造物ですが、楽しんでいただけると幸いです。
それではどうぞ！

BATTLE 1

季節は春。暖かい陽射しが入学したての学生たちを出迎える、
そんな季節。

「ハア、ハア、ハア……」

1人の少年が走っていた。

「まずい……また遅刻だ。はやくも遅刻魔の異名をとってしまう……
……！」

黒い学生服、右肩にショルダーバッグ。日本人特有の黒髪黒眼、
左目の下に絆創膏。

「なんで今日も目覚まし時計が鳴らないんだよ！」

そして、右の首もとには太陰太極図のバッジ。

少年の名は、白浜兼一。高校一年生。

「急げ、急げえ……ん？なんだあれ？」

急ブレーキし、地面に落ちてるピンクのハンカチを拾う。少し先に
金髪で三つ編みの女子高生。

「あの子のかな……？」

金髪の女子高生に追い付き、話しかける。

「これ落とし……うお！」

肩を叩こうと右手を伸ばした瞬間、首に女子高生の左腕が伸び、後ろ足に衝撃。バランスを崩し、体が後ろに倒れる。

「……ふっ！」

咄嗟に腹に力をいれ、足を丸めて勢いのまま後方宙返り。無事に着地。

「……100点……じゃない！いきなり何すんの！？ボクを殺す気か！？」

兼一はいきなり自分を投げた女子高生に怒鳴り付けた。

「あ、ああ！？ご、ごめんなさい、つい反射的に！」

女子高生は振り向き、兼一に謝る。

金髪を三つ編みにし、2つの髪留めをつけ、眼鏡をかけた少女。

「す、すみませんですわ！」

名を風林寺美羽。高校一年生。

「で、でも、いきなり背後をとられたら、普通、投げ飛ばしません？」

「殺し屋か！？」

両方の人指し指をくっつけ、もじもじとしながらあり得ないことを言う美羽に対してつつこむ兼一。

「って、うわ！もうこんな時間だ！？君も急がないと遅刻だよ！！」

兼一は左手の腕時計を見てからまた走り出しそうとした。

「あ、そつだ！これ、君の？」

だが、兼一は手に持っていたハンカチを思いだし、美羽に手渡す。

「あ、は、はい」

「そつか！じゃ、そういうことで！」

「あ……てへ、またやってしまいましたわ」

走り出した兼一を見送り、頭に右手を軽く当て舌を出す美羽。

「それにしても……あの方、なにか武術をなさっていますわね。しかもかなりやり手」

さっきとは違って代わり、眼鏡の奥の瞳が不思議な輝きを見せる。

「そういえばあのバッジ、あの時のと同じものですわ……ま、偶然ですわね」

美羽の目の色が元に戻り、歩き出した。

「……あら？これは……」

美羽は落ちていた物を拾った。黒い革ひもに、銀色の十字架の装飾が施されたロケットペンダント。

「さっきの方の落とし物ですわね」

前を見ると遠くに見える兼一。追い付きそうには無い。

「会ったときにお礼と一緒に返すことにしましょう」

美羽はペンダントを制服のポケットに入れ、転校先の学校に向かった。

この出会いは、偶然であり、必然。出会うべきして出会った人。

「やばいやばいやばい！！」

1人は幼い頃に深い傷を負いながらも夢を追い続ける少年。

「ふふっ、今度こそお友達ができるといいですわね」

もう1人は幼い頃から武術の世界に入り、普通とは違う生活をしてきた少女。

2人の運命が交差し、物語は始まる。

BATTLE 2 (前書き)

連続投稿！いつまで続くかな……？

BATTLE 2

「はあ、はあ、はあ、まいった……5分の遅刻だ……」

ようやく学校に着いた兼一。だが、間に合わず5分の遅刻し、教室の扉の前に立っていた。

「……だが、どっかの偉い人はこう言った。待つ身と待たされる身、どっちが辛いかと……」

兼一はどこか説得力に欠ける言葉を言い、ガッツポーズをした。いわゆる、開き直りである。

「そうだ、ボクだって遅刻したくてした訳じゃないし！いつそ堂々と入ろう」

開き直った兼一は、堂々と教室の扉を開けた。

「おはようございま〜……うおっ！」

元氣よく挨拶をし、教室に入ろうとした瞬間、顔めがけて飛んでくる物体。

「ま、マトックス避けっ！」

飛んでくる物体を、少々著作権的にマズイので伏せ字を使った上体を後ろに反らす避け方で躲す。

「あ、焦った……」

眼前を通り過ぎた物体は黒板消し。目標を外した黒板消しは、鈍い音を立てて壁にぶつかる。

「てか、明らかに当たったらヤバい音が鳴ったよ……」

「ちっ……… 躲しおったか」

「今、舌打ちした！絶対舌打ちした！！」

「やかましい！………どっちが辛いかは知らんが………どっちが悪いかはわかりきつとる！！」

舌打ちをし、説教を始めた人物。

眩しく光り輝く頭。眼鏡の奥には優しくも厳しいまさに教師の眼差し。その名を、安永福次郎（53）日本史教師。趣味は文化財鑑賞と、日本史教師ならではの（？）なお方だ。

……この説明、誰得？」

「……説明は済んだか？さっきから独り言をブツブツと……」

「しまった！地の文を言ってしまったようだ！」

兼一は、しまった！という顔をし手を口に当てる。今のやり取りを見てクラスメイトはクスクスと笑いをこらえる。

「失礼しました安永日本史教諭！今日も廊下に立っています！」

「当然だ！！！」

敬礼のポーズを取り、安永先生から渡されたバケツを持ち、教室の外から出る。

「くそっ……ん？」

ふと教壇を見ると、金髪の少女が立っていた。朝に出会った女子高生だ。

「あれ？なんで？この娘たしかにボクより後から歩いて来たはず……なぜ先に？」

少女は明らかに兼一より後ろにいた。なのに、5分の遅刻をした兼一より早く学校にいた。

「あ、途中だったな。彼女がこのクラスに転校してきた、風林寺美羽君だ！」

「風林寺……美羽」

金髪の少女の名は、風林寺美羽……と言つらしい。

「というか……転校生だったんだ」

「……おい、白浜……さっさと廊下に……」

気付くと安永先生の頭にピキリと怒りマークが浮かび上がり、体からオーラを発していた。

「き、気！？気ですか亀○人さん！」

「出んかあああ！あと誰が亀仙〇だああ！」

「うはあっ！す、すんませ〜ん！？」

安永先生はチヨークを3本投げつけながらツッコミ、兼一はそれを躲しながら教室に出る。

「まったく……あ〜すまんすまん風林寺君。大丈夫だったかね？」

「はい」

あの時、美羽の頭の上を通過したチヨーク。咄嗟に頭を下げ躲した為、被害を受けずにすんだようだ。

「高校生活が始まってまだ1ヶ月という時期だが……みんな仲良くやるんだぞ！」

思わず耳を傾ける兼一。ハイイや、ウース等の返事が聞こえる。

「松竹林高校から来ました、風林寺美羽です。よろしくお願いしますですわ」

教室から美羽の自己紹介をしている声がする。

「松竹林高校？あの名門の？なんでうちの高校に来たんだ？」

名門からこの不良が多い高校に……兼一はその事に疑問を覚える。

「これで朝のホームルームを終わる。日直！」

「きりーっ、ねーい」

「お、やっとか……」

ホームルームが終わり、ガヤガヤと教室が騒がしくなった。教室の扉が開き、安永先生が現れる。

「白浜、次からは気を付けろよ。バイトが忙しいのは分かるが、それで勉強に支障が出るのは頂けないからな」

「は、はい」

呆れた目をしながら説教をする安永先生に対し、苦笑いをしながら答える。

「ふむ、よろしい。教室に戻りなさい」

「了解です」

入室の許可を得たのでそそくさと教室に入る兼一。

「さっきのやりとり最高だったぜ白浜！」

「○仙人はねえわ！あれはウケたわ」

入った瞬間、クラスメイトの男から声をかけられる。さっきのやりとりが面白かったようだ。

「はははっ、まあね」

適当に対応し、自分の席に座る。ふと、美羽の方を見る兼一。

「さすがは転校生。囲まれてるなあ」

転校生の特権というか、役目というか、女子や男子に囲まれて質問されてる美羽。

ワタワタと戸惑いながらも、丁寧に一人一人の質問に答えている。

(真面目だなあ……ま、ボクには関係無いけど)

兼一は欠伸をし、腕を枕にし、顔を伏せる。そして、そのまま眠りに入った。

放課後

チャイムが学校中に鳴り響き、放課後を告げる。

「……ん、もう放課後か……昼休み以外ほとんど寝てしまった」

目を擦り、両手を挙げて背伸びをすると背骨が鳴った。

「んっ、ふうふう……さて、帰るか」

ショルダーバッグを肩にかけ、教室を出る。

「け〜んい〜ちく〜ん」

「うわぁっ！う、宇宙人!？」

ぬつと現れたのはまさに宇宙人。耳は尖っていて鼻が長く、オカ
ツパの宇宙人だ！

「まてい！兼一！逃げるなあ！」

宇宙人の名は、新島春男。兼一とは中学から同じの男。強い不良
に従い、弱い者にはいじめをする、まさに最低と腐れゲス宇宙人だ
！」

「地の文が出てるぞ……」

「これまたウツカリ。それで、何の用だ宇宙人」

「おめーんとこのクラスに、誰か転校してきたらしいじゃねーか。
どんな奴だ？」

「……女の子だよ、眼鏡をかけた」

「女あー？へん、なんでえ、じゃああのクラスのパワーバランスに
変更なしと……」

質問の答えに満足したのか、新島は手元の電子手帳を操作し始め
た。

「あのさあ宇宙人、もう帰っていいか？」

「ん、ああ、もういいわ……というか兼一」

にやにやと不気味な笑みを浮かべる新島。その不気味さに少しひ

く兼一。

「何度も言うが、ボクはこの学校を支配するなんて事はしないからな。不良じゃあるまいし……」

「ちっ！もつたいねえな……お前の実力ならすぐだったのに」

「会ったび言うなあ……ボクはそんなに強くないって」

「はんっ！どの口が言うか！知ってんだぜ俺はよお……お前の実力も、お前のバイトも！」

これ見よがしに電子手帳を掲げる新島。そしてタッチペンを使い、電子手帳を操作する。

「白浜兼一……成績、中の下！運動神経、上の上！ルックス中の上！体格、中の上！喧嘩指数、上の上の上！！」

電子手帳のデータを読み上げる新島。またかといった感じに聞く兼一。

「総合評価Aプラス！！ランク、カリスマ人間！これを聞いてもそんなこと言つかあ！？」

「……はあ」

ゼーゼーと息を荒げる新島に対し、兼一はため息をついた。

「それ、前にも聞いた。まったく……よくそんな事を調べるよな」

「ふつ、情報は全てだ。情報無くして世の中生きられん」

「はい、はい……じゃ、帰るわ」

話しは終わりだと帰ろうと踵を返す。

「待て待て！……お前、バイトしているだろ」

慌てて呼び止める新島。だが兼一は気にせず帰ろうとする。

「そんな誰でも知ってるぞお」

「違う、普通のバイトじゃない……裏のバイトの事だ」

「……………」

兼一は新島の言葉で立ち止まった。

「お前、喫茶店のバイトの他に裏でバイトしてんだろ？……しかも、その筋では有名な『黒脚』って呼ばれてるらしいじゃねえか」

「……………」

「夜の裏通りでやってる……よ」おい……新島「……ん？ひい！」

新島の言葉を遮り、振り返る。そして、普段の兼一では無い、獐
猛な目付きで新島を睨む。

「その話、誰にも言つなよ……？」

「わ、わわわ分かってる！誰にも言わねえよ！！」

ガタガタと震える新島。自分が地雷を踏んだことに気付き、言わないと約束する。

「ならいい……んじゃ、バイバイ」

新島の答えを聞き、元に戻った兼一は手を降りながら帰宅した。

「……………ふうふう」

兼一が廊下を曲がり、見えなくなったところで大きく息を吐く新島。冷や汗が顔中に流れ出ていた。

「あれはヤバいな……地雷だったか。死ぬかと思っただぜ」

震える手で額の汗を拭う。びっしょりと袖が濡れた。

「アイツがあんなヤバい野郎だったなんてな……これはデータを書き換えなくては」

またもや電子手帳を操作し、兼一とは反対方向に歩き出した。その後ろ姿は、まさしく宇宙人だった。

BATTLE 2 (後書き)

宇宙人登場回。兼一の口調がコロコロ変わるのには人によって使い分けているからです。

……そういってしまってください。

BATTLE3 (前書き)

ちょっと過去のお話が出ます。

BATTLE 3

「……………またか」

雀がチュンチュンと鳴きながら飛び、朝の日差しが町を照らすそんな日。

とある一軒家の、とある部屋の、とある少年は目を覚まし、手元の時計を見つめていた。

「なぜ鳴らない？なぜに鳴らない？君、目覚まし時計だよね？」

形容しがたいこの怒り、手に力が入り、ミシミシと時計に圧がかかる。

痛い痛いとき計が言ってるような気がした。

「また、またか……………またなのか？」

兼一は顔を伏せ、プルプルと震える。そして…………

「遅刻だあああああ！！」

叫んだ。

「うおお！よし、着替えた！朝飯は……………食パンでいいや！」

急いで着替えて顔を洗い、歯磨きをした兼一は、食パンを食わえ、シオルダーバッグを肩にかけた。

「ヤバいやババ！」

玄関に行き、靴を履いて扉を開けた。一面の青空、白い雲、天気は快晴だ。

「あ、いい天気……じゃなくて、遅刻だあ！」

勢いよく扉を閉め、鍵をかけて走り出した。いつてきますも言わずに……

「どちくしょう！また寝過ぎたあ！！あの目覚まし時計、後でぶっ壊してやるう！」

目覚まし時計を壊すと決めつつ、学校にむかって走る兼一。

「あ、あれは……」

少し先に金髪の三つ編み少女。風林寺美羽だ。彼女は遅刻寸前なのにゆっくりと歩いている。

「君も急がないと遅れるよおー！」

通りすぎ際に急ぐよう促し、走り抜ける。

「あつ。あのこれ……」

彼女はポケットからペンダントを取り出そうとしたが、兼一は聞こえてなかったようで、気付かず走り去っていった。

「……あらら、仕方ないですね。さて、近道近道」

行ってしまった兼一を見送り、彼女はペンダントをポケットに仕舞い、細い路地を曲がった。

「つ、着いた……すいませ……ひい！」

ようやく学校に着き、教室の扉を開ける兼一。開けた瞬間、顔めがけて飛んでくるチヨークを首を曲げて避ける。

「……粉碎したよ」

躲したチヨークは壁にぶつかり粉碎。粉だけになっていた。

「先生……いつか人殺しちゃうって……あの威力は」

「当たってないから無問題だ。ほれ」

チヨークを投げた張本人、安永は兼一にバケツを手渡した。

「廊下に立つてきまゝす……はい？」

そそくさと廊下にむかう兼一は、あることに気付く。

「嘘……」

教室の窓際の席、兼一よりも後から来ていた美羽が、クスクスと笑いながら席に座っていた。

「……………」

呆然とする兼一。だが、気にしてもしようがないと思った兼一は、教室から出た。

時刻は12時15分。昼休みのチャイムが鳴り、ガヤガヤと教室から出るクラスメイトたち。

「今日も先回り……………何者だろうあの娘？」

兼一は一足早く教室から出て外にある敷地内のベンチに座って弁当を食べていた。

「まあ、いいか……………ん、このメロンパン当たりだな。中のクリームが旨い」

昼食はコンビニのメロンパン。名前は白い液体メロンパン……………そんな名前で大丈夫かと、言いたくなるような商品名だ。

「昼食がメロンパンって……………せめてカレーパンとか食べたかったな……………まあ、贅沢は言えないけど」

たまたま家にあったメロンパンだけで昼食を終える兼一。だが、高校一年生の育ち盛りの時期には足りない昼食だった。

「さて、飴はつと……ん？あれ？な、無い……無いぞ！！」

食後の飴をポケットから出そうとしたところ、何かが無いことに
気付き、ポケットや鞆の中を探す兼一。

「無い！！ペンダントが無い！？嘘だろ……落としたのか！？」

ガサガサと鞆を探り、制服の上着を脱いで内ポケットまで探すが、
目当ての物は見つからない。

「あのう……お探しの物ってこれですか？」

「！？」

声に気付き、後ろを振り替える。だが、いるのは1本の木だけ。
キョロキョロと辺りを見渡したが、誰もいなかった。

「あ、上ですわ」

「上……？うわっ！！」

上だと言われ、木を見上げると見えたのは靴の底。咄嗟に右腕で
ガードすると、ちらりと見える肌色と白い布。

「へ？……ぶっ！！」

思わぬ光景に動きが止まった兼一の顔に、もう一方の足が乗っか
る。

「……なに？何かボクに個人的な恨みでもあるわけ？このあいだと
いい、これといい……」

「ごめんなさいごめんなさい！！この高校スカート短くて！！」

顔に靴の跡ができ、自分怒ってますよと頭に怒りマークが浮かび
上がる兼一に対し、ペコペコと謝る美羽。

「まったく……ま、役得もあつたけど」

「へ？」

「いや、なんでもない」

さっきの光景を思いだし、口元がにやける兼一。口に出ていたよ
うでバレないようににやけた口を手で隠した。

「私のバカ！えい！……あ、そうですね。あなたの落とし物ってこ
れですか？」

左手で頭をコツンと叩き、反省する美羽。その後、ポケットか
らペンダントを取りだし、兼一に渡す。

「ああ！！ボクのペンダント！あ、ありがとう！」

兼一はすぐにペンダントを受け取り、嬉しそうに美羽にお礼を言
う。

「よかったですわ。大事な物なんでしょう？」

「はい、大切な物です。すごく、大事で、大切な……」

受け取ったペンダントを握り、さっきのにやけ顔とは大違いな、優しい笑みをこぼす兼一。

「（あ……優しい笑顔……本当に大切な物なんですわね）」

美羽は兼一の笑顔を見て、この人はいい人だと思った。

「（でも……どこか悲しそう？）」

だが、美羽はその笑顔の奥に悲しみが見えた。優しいけど悲しい、そんな複雑な感情がある気がした。

「あの……」

「あ、はい！ごめんなさい、ボーツとしてましたですわ！」

兼一の呼び掛けに反応する美羽。考え事をしすぎてボーツとしていたようだ。

「いえいえ、本当にありがとう」

「あ、お、お礼はいいですわ……あ、そうですわ」

美羽は兼一にお礼を言われ、少し照れるが、いい事を思い付いたようでポンと手と手を合わせる。

「（反応が古い気が……）なんですか？」

「あの……私と友達になってくれませんかですわ？」

「……………へ？」

もじもじとしながら言う美羽の言葉に少し間を開けてから気の抜けた返事をする兼一。

「いや、まあ、別にいいけど」「本当ですか！」「……………う、うん」

友達になると言った兼一に心の奥から嬉しそうに声を出す美羽。よっぽど嬉しかったのか、わくわくと言いながら喜んでいた。

「（可愛いな……こんな事で喜ぶなんて）」

兼一は些細な事で喜ぶ美羽を可愛いと思った。

「これで1人、友達をゲットですわ！！」

「ははは……………」

「自己紹介がまだでしたわね。私は風林寺美羽。美羽と呼んでくださいー」

「あ、ボクは白浜兼一、兼一でいいですよ」

「はい、兼一さん！」

互いに自己紹介を済ませ、ベンチに座り会話をする。

「あのう、色々教えていただきたいのですが……この学校、新体操部ありますか?」

「ああ、あるよ。たしか大会で優勝したとか……」

「あるんですか、よかったです」

と、部活の話をする。

「新体操やるんだ?」

「ええ少し。なるべく女の子らしいスポーツがしたくて……兼一さんは?」

「ああ、ボクはバイトが忙しくてね……部活には入ってないんだ」

「へえ、バイトですか……運動部かと思いましたのに」

「へ?なんで?」

「だって、身のこなしがどこか運動部っぽくて」

ニコニコ和やかな雰囲気会話をする2人。

「まあ、それはちょっと……武術をかじってるからさ」

「……………」

笑顔で答える兼一に対し、黙る美羽。

「そうですか……やはり」
「ん？」

突然、一陣の風が吹いた。和やかな雰囲気か鳴りを潜め……

「なさるんですか…… 武術」

「……」

ピリツとした空気が、2人の周りを取り囲む。

美羽の目が不思議な輝きを見せ、兼一もその空気に当てられ、目の奥に不思議な輝きを見せる。

「……」

「……」

見つめあったまま止まる2人。まるでここだけ時間が止まり、別世界のようになっていた。

そんな時、突然鳴り出すチャイム。昼休みが終わったようだ。

「あ、まずいですわ！遅れてしまいますわ！」

「しかも次は日本史！奴だ……奴が来る！」

「急ぎましよう兼一さん！」

「あ、待って美羽さん！」

さっきまでの空気はどこにやら、普段通りの2人に戻り、バタバタと教室に走り出した。

「さあて、帰る帰る……今日はバイト無いし……夕飯何作るのかな？」

カアカアとカラスが鳴き、日が沈みかけ空がオレンジ色に染まる夕暮れ時。学校は下校の時間を迎え、兼一は帰宅していた。

「買い物していこうかな？……いや、まだ冷蔵庫に鶏肉があったな……トマトもあるし、今日は鶏肉のトマト煮かな？」

今日の夕飯の献立を考えながら歩いていると……

「ん？なんだ？」

遠くから怒鳴り声が聞こえる。この先の曲がり角からのようだ。

「……げっ」

そこにいたのは黒い車に4人の男。まさにヤクザな格好をした方々だった。

「ん？……あれは」

そして絡まれているのは金髪の少女……美羽だ。隣にはおじいさんと地面に散らばったミカン。

「おじいさんを突き飛ばすとはどういう事ですか？」

「ちんたら道の真ん中歩いているから隅にどかしたんだよ！」

「お前ら弱いんだから隅っこ歩く！！こりゃ自然の摂理だろ？」

美羽は2人の男と話していた。しかもヤクザたちは自分は悪くないと自分勝手な考えを言っている。

「ほら、周りを見てみるよ！」

男につられて美羽と兼一は周りの人を見渡す。そこには、ヤクザを素通りし、見ないようにしているサラリーマンや主婦。

気付いているのに助けようとはせず、見ないふりをしていた。

「……………」

その光景を、見つめる兼一。そして思い出す昔の思い出。

「……………ちっ」

舌打ちをし、頭を振って忘れるようにする。

「（結局、みんな同じなんだ……………あの時だって……………」

忘れようとしても忘れられないあの情景。幼い頃の記憶。

黒い服装を纏った大人たち。

お経を読むお坊さん。

泣きもせず、笑いもしない無表情の子供。

男性と女性、そして少女の写真。

そして、ひそひそと話す大人たち。

なんであの子だけ……

誰が面倒見るのよ……

私はダメよ……もう子供がいるもの……

遺産だけはあるようだぞ……

ふん、貴様はそればかりだな……

お前も同じだろうがよ……この金の亡者が！

子供の事を見て見ぬふりをしたり、金だけのために引き取ろうとしたりする下劣な大人たち。

「（僕は……なんのために）」

無表情の少年。何も写さないその瞳は、ジッと畳の床を見つめて
いる。

「（なんのために……）」

「ごたくはいいから、あやまりなさい！」

「はっ！」

美羽の言葉で現実に戻る兼一。美羽の方を見ると、ヤクザの1人に頭を押さえられ、頭を下げていた。

「どうも物分かりがわりーな……」

「弱い者が、常に逃げると思っているなら……」

「！」

おい、クソガキ……お前、弱い奴がいつつも逃げてると思ってるのか？

だって、そうでしょ？弱い人はいつも虐められて、独りぼっちで、逃げ回ってるでしょ？

ふんっ、ちげえよ……人は誰だってなあ、牙を持ってるもんだ

……

きば？

おお、牙だ。弱い奴はその牙の使い方が分からなかったり、使っても勝てないって思ってたんだ……

なら、どうすればいいの？どうすれば強くなれるの？

簡単だ、牙を研げばいい。長い年月をかけて、丁寧に鋭く研ぐ

のわ。

研ぐまでに時間がかかるよ？その間どうすればいいの？

ああ？そんなの決まってるじゃねえか。逃げればいいんだよ。

結局逃げてるじゃん……

だからあ、ただ逃げるんじゃないよ……

「あなたの方がよほど、物分かりがわるいですわよ……」

「何だところのガキ……」

何がなんでも生き延びて、泥を啜りながら逃げて、それでも牙を研いで……

「……………」

兼一はヤクザの近くまで歩み寄った。

最終的には……

「ああん？なんだてめえ？」

「兼一さん？」

弱い奴でも……

「……」

逃げずに戦えるぞ！

「首肉！」
「コシエ」

「ぐえっ！！」

兼一は、グラスンをかけたヤクザの首を後ろに蹴り抜いた。

まあ、その為には勇氣と信念と根性が必要なんだがな……

おい、クソガキどうする？弱いまま逃げるか？それとも……

「おい、てめえら……」

グラスンの男は首を押さえながらバタバタとのたうち回っている。美羽の近くにいるヤクザ2人と車の近くにいたヤクザはこちらを呆然と見ている。

兼一はポケットから棒付きの飴を取りだし、口に加えてからヤクザを睨んだ。

俺と一緒に、牙を研ぐために逃げるか？

「レディに手え出してんじやねえぞ……クソヤクザ共」

BATTLE3 (後書き)

どうしても兼一にこれを言わせなかった！

少し話の内容がおかしいかもしれませんが、まあ、細かいことは気にすんな……申し訳ないです。

BATTLE 4 (前書き)

投稿してから1日で7750アクセス……何が起きた？

BATTLE 4

「てめえ……誰だ！」

「はん、てめえに教える名はねえよ」

兼一はいつもの口調ではない話し方でヤクザを睨む。

「ヤクザ相手に何考えてんだてめえ？」

車の近くにいたオールバックの髭ヤクザが兼一の近くまで来る。

「さあ……何考えてたんだろうな？気づいたら蹴ってたわ」

「クソガキよくも田中を」

美羽の近くにいたパーマので右目に傷がある男は、ポケットに手を入れた。

「へえ、田中っていうんだ？なんとも普通だな。改名して八九さんにしたらどうだ？八、九、さんでヤ、ク、ザ……ぷぷっお似合いじやねえ？」

「てめえ……なめやがって！鼻を削ぎ落としてやるぜい！」

パンチパーマの男……パンチさん（仮）は、ポケットからドスを出した。

その瞬間……

「ぶふえ！」

顔を蹴り抜かれた。

「オ、オレを踏み台にしたあ！？」

「きよおおお！！指がああ！！！」

蹴り抜いたのは美羽。頭を押さえていたドレッドの男の指の関節を外し、オールバックの男を踏み台にしてパンチさん（仮）を蹴り飛ばした。

「ぴゅう……やるなあ」

鮮やかに蹴った美羽に対し、口笛を吹きながら感心する兼一。

美羽は蹴った反動を使い、空中で2回転してから着地。

「おつむにきましたわ！」

いつの間にか眼鏡を外し、髪紐が解けて三つ編みがロングヘアに変わった。その姿はいつもの美羽とは違い、これこそが本当の風林寺美羽の姿。

上から落ちてきたドスを見ないでキャッチし、ヤクザ共を睨む。

「いい大人が、こんなオモチャ振り回すんじゃないやありません！」

美羽はドスを車の窓ガラスに突き刺し、上に持ち上げ刃をへし折った。

「こ、このアマあ……！」

踏み台にされたオールバックは、後ろから美羽に殴りかかる……だが、その攻撃は空を切った。

「身軽だなあ………」

美羽は後ろからの攻撃を見ずにバク転をして躲した。その身軽さに兼一は感心しっぱなしだ。

「このガキ……この………」

着地した美羽にオールバックは右腕を降り下ろすが、左足を上げ左手を膝の近くに置き、右手を添えた防御でガードする。

続けて左のアップパーをしゃがんで躲し、掌を相手にむけ右手を脇腹の近くに、左手を右手に添えて左足を前に移動させながら……

「ていつ……！」

左足で震脚、右の掌底を相手に叩きつける。

オールバックは口から歯を吐きながら後ろに倒れた。

その動きは……まるで風を切る羽のようだった。

「す………」

その姿はとても美しく、思わず見とれるほどだった。

「クソ……くらえやああ……！」

指を外されたドレッド頭は、美羽に殴りかかった。

「うおおお……お、お？」

「まったく……空気が読めねえクソドレッドだな」

ドレッド頭が殴る前に兼一は右足をドレッド頭の後頭部に乗せた。

「レスパシジョン
受付！！」

「ぐばあ……！」

右足を首に絡め、地面に降り下ろすとドレッド頭の顔を地面に叩きつけた。

「クソドレッドが……地面でも食ってる」

兼一は右足を降り、ピクピクと地面に寝そべったドレッド頭に吐き捨てる。

「ありがとうございますわ、兼一さん」

「ん？ああ、美羽さん。大丈夫？」

「はい、お陰さまで」

ニコニコと微笑みながら近づく美羽。

「さて、おじいさん！無事ですか？」

「ええ、ありがとうございます……」

地面に座り込んだおじいさんに手を差し出し、立ち上がらせる。

「はい、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「ちっ、あいつら……食べ物粗末にしゃがって」

美羽は杖をおじいさんに渡し、兼一は散らばったミカンを拾い集め、紙袋に入れていた。

「これでよし！おじいさん、もう絡まれないようにして下さいね」

「すまんねえ、世の中まだまだ捨てたもんじゃないのう」

おじいさんはしみじみと言った後、紙袋と杖を持ち、一礼してから帰っていった。

「ふう……さて、帰りましょうか」

「はい！兼一さん、助けていただいて、ありがとうございます！」

「いやいや、どういたしまして」

兼一は純粋なお礼に気恥ずかしくなり、顔を赤らめながら頬を掻く。

「私、男の方に助けをいただくなんて生まれて初めての経験でした

わ

「ははは……そりゃあ、あんなに強ければねえ」

兼一はさっきの美羽の戦い方を思いだし、苦笑する。

「この人たち……どうします？」

「……放置しますか」

倒れているヤクザたち……気絶しているようだが、放置することにした。

「あ！私、今から買い物に行かなきゃですわ！それでは兼一さん、また明日！」

「あ……行っちゃった。というか速いなあ……」

用事を思い出した美羽は、鞆を持って走り去っていった……タイムサービスがどうのこうのと言いながら。

「ボクも帰ろ……ん？これって……」

地面に落ちていた眼鏡。美羽は外したまま忘れていったようだ。

「意外とおっちょこちょいだな……ん？あれ？これおかしいぞ？」

ふと兼一は何かに気付き、眼鏡をかけた。だが見える景色は変わらなかった。

「……これ、度が入ってない。なんでだ？」

眼鏡を外して考えるが、いくら考えても答えは出なかった。

「まあ、いいか。明日返す時に聞こう」

兼一はポケットに眼鏡を入れ、棒付きの飴を舐めながら歩き出した。

「ぐえっ！」

倒れているヤクザを踏みながら……

「もうこのパターン飽きたわあ！！！」

次の日の朝、いつものように兼一は走っていた。

「目覚まし時計なんて嫌いだあ！！明日壊す！絶対壊すう！！！」

またもや鳴らなかった目覚まし時計。もはや呪われてるんじゃないかと思うほど自分の仕事をしていない。

「……あ、あれは」

前方に猫と戯れている美羽。頭からハートが出るほど猫に夢中だ。

「美羽さん遅刻します……よおおお!!」

後ろから話しかけ、右手が背中に触れようとした時、美羽は突然右手を掴み、一本背負いをした。

ギリギリで両足を地面に着け、背中から落ちるのを回避。

「……ピンク」

「あ……きゃあ！」

「へぶっ!!」

空を見上げてる状態の兼一の視界には、青空とスカートと肌色とピンクの布。

投げた事と、見られた事に気付いた美羽は、咄嗟に兼一の目を踏んだ。

「ぎゃあああ!!め、目が!目がああ！」

「も、申し訳ございません!つい条件反射で……」

目を手で覆い、ゴロゴロとのたうち回る兼一。ペコペコと謝る美羽。何事だところちらを見るサラリーマン……まさにカオス。

「お、おはようございます……美羽さん」

「おはようございます兼一さん」

涙目になりながらも挨拶をする兼一に苦笑いをしながら挨拶を返す美羽。

「昨日はごともありがとうございます。兼一さんてやっぱりお強い
ですわね」

「え、あ、いやあくそれほどでも」

兼一は褒められ、照れ臭そうにしている。

「最初のお友達があなたみたいな方でよかったですわ」

「ちょ、照れますって……あぁっ！！もうこんな時間！急がないと
3日連続遅刻だ！！」

照れながらも腕時計を見ると、時間が無い。このままではまた遅
刻してしまう時間だ。

「あの、よろしければ……近道知ってますけど」

と、目をぱちくりしながら言う美羽。

「え、本当！？やっぱりかぁ……いつも先回りしてるからおかしい
とは思ったよ！……あ、そうそう」

今まで疑問だった事が解決した兼一。ふとポケットの中にあるも
のを思いだし、取り出した。

「これ、昨日落ちてたの拾ったんだ」

取り出したのは昨日拾った眼鏡。兼一は美羽に渡した。

「あ！ああ……ありがとうございますわ」

眼鏡が無い事に気が付いた美羽は、慌てて眼鏡をかけた。

「……………」

「さて、では案内いたしますわ！」

美羽は近道を教えるために先に歩き出した。

「ねえ……美羽さん？」

「ほえ？」

目の前には10メートルほど幅がある川。

美羽は柵に足をかけ、話しかけてきた兼一の方を振り返る。

「さっきから飛び越えたり塀の上を歩いたり……色々言いたいことがありますか……………」

さっきまで通った近道。というか、人が普通通らないような塀の上や土手など、道とは言わない場所を歩いてきた。

「これだけは言わせて下さい……………」

「はい」

プルプルと震え、うつむく兼一。

「これは、道じゃ無いわあああ!!!!」

「ひゃっ!」

突然大声を張り上げた兼一。その声に驚く美羽。

それもそのはず、目の前にあるのは川。しかも横幅約10メートル。

常人では飛び越えれない距離を、美羽は飛び越えようとしていた。

「ここを飛び越えれば学校はすぐですわよ」

「いや、知ってますけど!知ってますけど!!普通あり得ないですよこればかりは!?!」

「……?」

必死にツツコミを入れる兼一だが、言っている意味が分からないと言わんばかりに首を傾げる美羽。

「とにかく、時間がありませんですわ……先に行きます!」

「へ?あ、ちよつとお!?!」

美羽は高くジャンプし、向こう岸の柵に着地。スカートが巻くれ上がり、ピンクの布が丸見えだった。

「いやん!ですわ……」

「……………」

柵の上でスカートを押さえる美羽。痛そうに頭を押さえる兼一。

「兼一さん、急いで〜!〜!」

「……………くそっ!〜!」

美羽に急かされた兼一は、柵に足をかけた。

「行くぜえ!! あい きゃん ふう〜い!!〜!」

気合いと共にジャンプする兼一。美羽並みに高く飛び、柵に届くかと思いきや……………」

「あ、しまった……………あれ着けばだった……………」

突然失速。重力により地面に引っ張られ……………」

「……………はぶっ!〜!」

柵に顔面からぶつかった。

「け、兼一さん!〜?」

明らかに届くかと思いきや、突然失速した兼一。どこか変な失速の仕方だった。

「だ、大丈夫ですか?」

「……あい きゃんと ふらひ……」

兼一は鼻血を出しながらなんとか這い上がり、バタリと倒れた。

BATTLE5 (前書き)

9000アクセスWWW

笑いが止まらんWWW

見ていただき、ありがとうございます！

BATTLE 5

「ごめんね美羽さん……ボクのせいで遅刻しちゃって」

「いいんですわ。だって、お友達でしょう?」

2人はあの後結局遅刻し、仲良く廊下に立たされていた。

「友達か……そうですね」

「そうですわ」

クスクスと笑う美羽。兼一もつられて笑った。

「んじゃあ、友達として質問していい?」

「なんですの?」

兼一は人指し指を立て、美羽に質問をした。

「その眼鏡、なんで度が入ってないのかな?」

「!」

美羽は兼一の質問に驚き、止まってしまった。

「……………」

「(もしかして、地雷だった?)」

止まったままの美羽。聞いてはいけないことだったのかと兼一は少し気まずそうにしていた。

「実は……前の学校では、1人も友達が出来なくて」

ポツリと美羽は昔の話をし始めた。

「なぜだろうって思ってたら、ある日……親切な子が教えてくださったの」

あんた目立ちすぎなのよ!!

「（ひがみか……）」

「だから、今度の学校では、とにかく目立たないようにしようって、地味な格好を研究したんですわ……」

苦笑しながら悲しそうにする美羽。兼一は黙って話を聞いた。

「でも、今は兼一さんという素敵なお友達が出来て、とっても嬉しいですわ」

「！」

美羽はニコツと兼一に笑顔を見せた。突然の笑顔の不意討ちに頬を染める兼一。

その笑顔は、とても輝いていた。

「あ、ありがとう?」

「クスクスッお礼を言うのは私ですわ」

2人は互いに笑い、終始和やかな雰囲気だった。

放課後を知らせるチャイムの音。部活に行ったり、下校したりする生徒で騒がしい。

「さあて……帰りますか」

「あ、兼一さん！一緒に帰りませんか？今日は部活が無い日ですの！少し用事があつて待たせてしまうことになりましたが……」

ショルダーバックを背負い、席を立った兼一に美羽が話しかける。

「すみません美羽さん……今日バイトなんですよ」

一緒に帰ろうと誘った美羽に兼一はバイトがあると断った。

「バイトですか……残念ですわ。そういえば、何のバイトをしていますの？」

残念そうにする美羽だが、兼一のバイトが気になり、質問した。

「喫茶店ですよ。喫茶マツエって店で、厨房の仕事をしています」

「喫茶店……スゴいですわね！」

「今度来てくださいね。お待ちしております」

兼一は執事のようにお辞儀をした。そのお辞儀の仕方にクスクスと笑う美羽。

「はい、今度行かせていただきますわ」

「じゃ、また明日」

「はい、また明日！」

そうして、兼一と美羽はそれぞれ帰っていった。

「今日も頑張りますか……ん？」

靴を履き、敷地内を歩いているとどこからか怒鳴り声と女子の声が聞こえた。

「……あつちか？」

少し気になり、声のする方へ行く兼一。声は校舎の裏から聞こえる。

「おい！何しやがるてめえ！俺に水かけやがって！！」

「いっ、いっ、いっ、いっめんなさい！わぢとぢぢ……」

「黙れや！」

「ひい！」

そこには2人の胴着を着た男と、黒髪を三つ編みにし、2つに分けた眼鏡のセーラー服の少女がいた。

少女は泣きそうな顔をしながらオロオロとしている。

「……たしかあの娘、泉さん？」

少女の名前は泉優香。同じクラスの園芸部の部長だ。

「あの……許してください……」

「許すなあ？」

「おいおい、簡単に許すと思ってるのか？」

角刈りと坊主頭の男2人。胴着のズボンには、濡れた後がある。そして、泉の近くにはへこんでいるジヨウロ。

「……誤って水をかけたのか？」

状況进行分析し、兼一は助けるために歩き出した。

「……お前、意外と可愛い顔してんな」

「裏に連れ込むか？」

「いいねえ」

「ひっ……」

胴着の男たちは、下劣な笑みで泉を舐め回すように見たあと、ゲスな事を言い出した。

泉はその言葉を理解し、涙目になりながら逃げようとした。

「おっと待ちな！」

「きゃっ！！」

「！」

逃げようとした泉の三つ編みを掴んだ角刈り。急に髪を引っ張られ、地面に跪く泉。

それを見た瞬間、兼一は走り出した。

「逃げんじゃねえよ……」

「たっぷり可愛がってやるぶああ！！！」

「なっ！！！」

「……え？」

坊主男の台詞の途中、兼一は頬を飛び蹴りで打ち抜いた。

「ぶげえがばらあ！！！」

坊主頭は意味の分からない言葉を吐きながら吹っ飛ばされ、ゴロ

ゴロと地面を転がる。

何回転かした後、動きが止まり、そのまま気絶した。

「……………」

「てめえ…………いきなりなんだ!!」

「し、白浜…………君?」

兼一は着地し、角刈りの方を睨む。角刈りは泉の髪を放し、体を半身にし構えた。

「てめえ…………レディの髪の毛引つ張り、しかもゲスな事まで考えやがって…………3枚におろすぞ」

怒り心頭。まさにその言葉が相応しい顔で角刈りに話しかける兼一。

「なめやがって…………不意討ちしたぐらいでいい気になってんじゃねえぞお!!」

角刈りは兼一にむかって走りだし、右手の正拳突きをした。

「ふっ!」

兼一は正拳突きを上体を後ろに曲げ、躲した。

「なっ!!消えっ!」

そのまま地面に手を着けるほど体を曲げ、膝を曲げて逆立ちの状

態になった兼一。

「ブックティキナル
木犀型斬……」

「し、下……！」

そして、体をバネにし一気に相手の顎を……

「シュート……！」

「ぶうぶえっ……！」

蹴り抜いた。

顎を蹴り抜かれ、数十センチ上に飛ぶ角刈り。兼一は勢いのまま角刈りを飛び越え、空中で1回転した後着地。

兼一が着地した瞬間、角刈りは前に倒れ、気絶した。

「ふう……デザートはいらねえか」

「（すごい……普段、あんなに物静かなのに……）」

泉はさっきの攻防に唾然としていた。そんな泉の方に兼一は近づいてきた。

「血が出でる……大丈夫？」

「へ！？……あ」

気付くと泉の右膝が擦りむけ、血が出ていた。意識したとたん、

ズキズキと膝が痛む。

「だ、大丈夫！気にしないで……あ！」

泉は無理矢理立ち上がったが、痛みでよろけて兼一の寄りかかった。

「あ、ご、ごめんな……ひゃっ！」

思わず謝り、離れようとした瞬間、突然視界が変わった。

「無理しないで、保健室行くよ」

なぜなら、兼一は泉をお姫様だっこしたからだ。突然の事に思考停止する泉。

「な、へ、あ、え？」

「ん？どうかした？」

羞恥心から顔が赤くなり、言葉にならない言葉を言う泉。そんな泉ににこりと笑いかける兼一。

その笑顔を見た瞬間、泉の心臓が、ドキッと音を立てた。

「（え？今のって……もしかして）」

ドキドキと心臓が高鳴る。緊張とは違う感覚。

そう、泉はこの瞬間……

BATTLE 5 (後書き)

不整脈ですね、分かります。嘘です(笑)

才り展開&祝! 1人目落とししました!

これから段々と増やしていこうと思います!

BATTLE 6 (前書き)

アクセス数2万越えたWWW

何が起きたWWWGWだからか？WWW

さすがに怖くなってきたよ………(´・・´・´)

今回ようやくあの場所に行きます！

BATTLE 6

今日はほとんどの人が休みな日曜日。どこかにお出かけする家族や、学校が休みの小学生が元気に遊び回るそんな午後。

「えっと……ニンジンと、玉ねぎ……あとジャガイモ」

とあるスーパーの野菜コーナーに、1人の少年がいた。

「あ、大根が安い！買ったな……」

少年の名は白浜兼一。学校が休みなため、兼一はスーパーに買い物に来ていた。

「あとオリーブオイルも……どこだっけ？」

兼一の手にある買い物かごの中には、野菜や魚や肉など多くの食材が入っていた。

どれも兼一が厳選した質の良いものばかりである。

「あっちだっけ？……あ」

ふと兼一は人混みの中、とある人物を見つけた。

「これも買いましょうか……」

金髪でロングヘアで、普段の格好とは違い白いセーターに下はスパッツ、いつもの眼鏡を外した少女。

名を風林寺美羽。

「美羽さんだ……美羽さん」

「ほえ？……あ、兼一さん！」

兼一が声をかけると美羽は振り返り、兼一に気付いて手を振る。

「買い物ですか？」

「はい！そういう兼一さんこそ」

「冷蔵庫がもう空なもので……」

学校と同じように会話する2人。美羽の手にも買い物かごが握られていた。

「今日は眼鏡無いんですね」

「ええ、今日は休日なので」

「やっぱり眼鏡無い方が可愛いですよ」

「いやですわ〜兼一さんたら！褒めても何もでませんことよ」

兼一に褒められ、恥ずかしそうにしながらもまんざらでもない美羽。

「今日は1人ですか？」

「いえ、今日は「美羽」。米はこれでいいかね？」あ、はい！秋雨さ

ん

2人の会話に入る1人の男性。平均身長より高めな背丈、黒髪でダンディーな口髭を生やした胴着の男。

「えっと……お父さんですか？」

「違うよ。私は岬越寺秋雨、この子の住んでる所で共同生活している者さ」

男性の名は、岬越寺秋雨。まさにダンディーな素敵なおじ様だ。

「あ、そうですか。ボクは白浜兼一です！美羽さんとはお友達で、同じクラスの者です」

「ふむ、中々礼儀正しい少年だね。若いのに挨拶がしっかりしてる」

「あ、ありがとうございます」

「それに………」

「……？」

自己紹介をした兼一に感心した秋雨は、どこか見定めるように兼一を見始めた。

「えっと……なんでしよう？」

「ああ、すまない。気を悪くしたかね？」

「あ、いや、別に大丈夫ですけど……」

少し居心地が悪くなり、恐る恐る聞く兼一。その言葉に気付いた秋雨は、兼一に謝った。

「君……中々おもしろい修行をしているね？よくそれで普通に歩けるね」

「！」

秋雨の言葉に驚く兼一。秋雨は一目見ただけで兼一のある秘密を見破った。

「あの……失礼ですが、何か武術をしていますか？」

「ん、まあ……柔道を少々」

「……そうですね」

兼一は秋雨の答えにどこか残念そうにしていた。

「あーそうですねー！」

「へ？」

突然声を張り上げる美羽。兼一はいきなりの事に気の抜けた返事をする。

「兼一さん、今日私の家に来ませんか？」

「え？」

「……………でか」

「ち、どござい」

「遠慮はいらないよ」

「あ、はい……………」

あれから美羽に誘われた兼一は美羽の家の前に来ていた。遠慮はいらないとかなりの量の食材を、普通のよりも数十倍は大きいリュックを軽々と背負った秋雨に言われ、口元が引きつりながら答える兼一。

それもそのはず……………

「……………でか」

兼一の目の前には、威圧感のある門がそびえていた。

門の上には『泊山梁』と達筆な字で書かれた看板。門の右には『梁山泊』とこれまた達筆な字の看板。

そう……ここが美羽の住んでいる家、その名も梁山泊。

「ち、びじぞー！」

「……………」

その趣のある（というか古い）大きな門を軽々と押し開ける美羽。

「（もしかして軽い？）」

「いや、軽くないよ。普通の人ならね」

「！」

思っていた疑問に答えた秋雨。声に出していないはずなのに答えた秋雨に驚く兼一。

「え、今……心を読みました？」

「ん？なんのことかね？」

惚ける秋雨。そのままスタスタと去っていった。

「……………（帰ろうかな？）」

何か言い様のない感覚が身体中を包み、帰ろうか迷う兼一。

「お友達を家に招待……うふふふ」

「……………」

兼一は、すごく嬉しそうにしている美羽を見て、もう後戻りはできないと心に決めた。

「ここって道場なんですか？」

梁山泊の敷地内に入った兼一は、辺りを見渡した後、美羽に質問した。

「まあ、そんな感じですね。教えたりはしてませんが……」

「へえ……………」

正門を抜け、右側には母屋。左にはでかい道場。敷地はかなり広く、奥の方には森が見える。

「すごいですね……………」

「普通ですわよ」

「……………」

これを普通とは言わないと言わんばかりの表情で美羽を見るが、ニコニコと笑いながら案内をしていた。

よほど友達が家に来た事が嬉しいようだ。

「……ん？あれは」

兼一は、道場の近くにいる褐色の肌に水色の髪の2メートルの巨人を見つけた。

その巨人はサンドバッグにもすごい音を立てながら蹴りを放っていた。

「……ムエタイ？しかもかなり強い」

兼一は立ち止まり、ムエタイの男性を凝視した。

ムエタイの男性は、何度も何度もサンドバッグを蹴る。

「すごいな……」

兼一がポツリと言った言葉に、耳がピクリと動くムエタイの男性。その瞬間、サンドバッグを蹴り破いた。

「おお！！」

無惨に破かれたサンドバッグを見て、感嘆の声を上げる兼一。

「があああ！！」

次はグローブを着けた右手で石の灯籠を砕くムエタイの男性。

「すげえっ！！」

「キエエエエ！！」

今度は木を蹴り、へし折った。

「かつこい……ぶ！」

突然兼一は口を抑えられた。驚き、見上げるとそこには金髪の老人だった。

だが、その老人は背が2メートル、筋肉隆々の巨体の人物だった。

「も、もがつ……！」

「すまんの、あまり煽らないで欲しいんじゃ……喜んで調子に乗るんじゃよ」

その老人は苦笑しながら立派な顎髭を撫でて言った。

「こら つーやめんかアパチャイ!!」

そしてそのままムエタイの男性に怒鳴った。ムエタイの男性は、アパチャイというらしい。

そのアパチャイは、嬉しそうに家の塀や木を殴り壊していた。

「ぶはっ！あ、あなたは？」

「わしかの？わしは美羽の祖父で、この梁山泊で長老じゃ！」

老人は風林寺美羽の祖父にして、この梁山泊を纏める長老。その威圧感と肉体は老人とは思えない物だった。

「あ、あの……ボク……いや、自分は白浜兼一です！風林寺さんの友人をさせていただいてます！」

兼一は姿勢を正し、頭を下げて自己紹介をした。

「ほうほう、若いのに挨拶がすっかりしてるの」

長老は兼一の挨拶に感心し、顎髭を撫でながらニコニコと笑う。

「そうかね、美羽の友達かね。これは良い友達が出来てなによりじや」

「ははっ、ありがとうございます」

美羽の友達だと聞き、嬉しそうにしている長老。

「あれ？そういえば美羽さんがいない」

「美羽なら台所にいるはずじゃよ」

「しまった……見るのに夢中で美羽さんを忘れてた」

いつの間にかいなくなっていた美羽。先に台所に行ってしまったらしい。

「それにしても……おぬし、なにか武術をしておるな？」

「え……」

長老の言葉に反応する兼一は、何もしていないのに自分が武術家だと見抜いた事に驚いた。

「……もしやあなたは、何かの武術の達人ですか？」

「ほっ、達人という程ではないがの……生まれてこのかた負けた事

はないぞ！」

ニコリと笑いながらすごい事を言う長老。明らかに達人と呼ばれる部類に入るだろう。

「ここには他にも武術の達人がいるんですか？」

辺りを見渡しながら質問する兼一。周りにはアパチャイの他には誰もいない。

「もちろんじゃ！どうじゃ、わしが案内しようかの？」

「え！いいんですか！？お願いします！」

兼一は梁山泊にいる達人を見るために、長老に案内してもらおうとにした。

BATTLE 6 (後書き)

梁山泊の師匠たちを小説で表現するのが難しすぎる……

読んでいただきありがとうございました！

BATTLE7 (前書き)

総アクセス数35,000突破……お気に入り登録数160件突破

……

……これって他の人から見たら普通なのかしら……？最近分からなくなってきました。

BATTLE 7

「それにしても……ここ広いですね」

「ほっ、普通じゃよ普通」

「（この祖父にして孫ありだ……）」

「失礼な事を思わんでくれ……」

「またかよ!？」

長老と歩く兼一は、会話しながら廊下を歩いていた。

「……ん？」

廊下を歩いていると、襖が少し開いている部屋を見つけた。

「（綺麗な人だな……）」

そこにいたのは着物を着た女性だった。黒髪を紐で束ね、ポニーテールにしている。

着物はピンク色の紅葉柄で、足元が普通の着物よりも短く、黒いニーソックスを履いた綺麗な足が覗いていた。

「（しかも……特盛!）」

兼一の目線の先は、女性の豊満な胸だった。

「つて、え？……なに？」

兼一は目を疑った。女性の背には鞘に入った長大な刀。柄の部分には布が巻かれ、鏝が無い刀を背負っていた。

そして周りには西洋の剣や日本刀、サーベル等、多種多彩な刃物が棒に紐で固定され、刃を上にして立たせていた。

「……………ヒュッ」

女性は一息と共に刀を抜き放ち、高速で刀を振った。

遅れて斬り裂かれる剣たち。半分になったり3等分されたりと綺麗に斬られ、畳に刺さった。

「……………うそん」

兼一は女性の太刀捌きに呆気にとられた。

「おい！！ボクに何か用があるのか？」

「！あ、いや、その……………」

いきなり喋り出す女性。兼一は驚き、しどろもどろに答える。

「ならば畳の上からにしろ、馬剣星！！」

女性は誰かの名前を叫びながら刀を畳に突き立てた。

「ホッ。いやちよつと、下を通りかかっただけね！しぐれどん。」

畳から勢いよく飛び出てきたのは黒い帽子をかぶった中国風なお

っさん。

黒く長い口髭と眉毛を蓄え、カンフー服を着た兼一よりも低い背丈の男だった。

名を馬剣星というらしい。

「用はないね……」

「さて!!その怪しげなかめらで何を撮っていた?」

帽子を押さえ、立ち去ろうとする馬に、刀を突きつける女性。

女性はしぐれという名らしい。

「パン……風景ね!」

手元のカメラを袖に隠し、逃げる馬。

逃がさぬと言わんばかりに胸元から何かを取りだし、馬に投げつけるしぐれ。

投げた物は手裏剣のようだ。3つの手裏剣は馬にむかって飛んでいくが……

「ホッ!」

馬は、両手の人指し指と中指で2つの手裏剣を挟み、もう1つを口で食わえた。

その動きはまさに達人。投げたしぐれも達人のそれだった。

「うわっ!」

襖を開け、逃げる馬。横を通り過ぎた馬に驚き、声を上げる兼一。そんな兼一にむかって……

「！」

1つの手裏剣が顔めがけて飛んできた。

「ま、マ○リックス避けリローテッドおー!!」

飛来する手裏剣を上体を後ろに反らして躲した兼一。

著作権的に(以下略)

「……あちこち覗いてると、危ないぞ」

「……そういうのは先に言ってください……」

兼一の上を通りすぎる前に長老は指で手裏剣を挟みながら言った。それを上体を後ろに反らしたまま冷や汗をかき、答える兼一。

「(……)……何!？」

兼一は梁山泊に来た事を心から後悔した。

「さて、次はここじゃな……ここにいるのは空手の達人での、少々気難しくてのう」

「は、はぁ……」

長老の言葉に顔を引きつらせながら答える兼一。明らかにヤバい雰囲気が漂っていた。

「おーい、逆鬼君、いるかのお?」

「あぁん？なんだじじい……」

そこにいたのは黒髪をオールバックにし、鼻に横一文字の傷、顎に無精髭を生やした強面の男。

筋肉隆々の身体に高い身長、上半身が裸で素肌に一枚の黒い皮ジャンを羽織り、両腕に白い布を巻いた某世紀末な人のような格好。

空手の達人、名は逆鬼。

「あのお……」

「あぁん？なんだこのガキ？」

声をかけた兼一を睨む逆鬼。その眼差しは殺し屋のような鋭い眼だった。

「この少年は美羽の友人でな、達人を見てみたいと言っておつての。今案内していたのじゃ」

「白浜……兼一です。どうも」

「はんつ！で、お前……俺に何か用か？」

「……空手の達人なんですよ？何か技を見せてくれませんか？」

「……ちつ！わあつたよ」

兼一のお願いに瓶ビールを口にしビールを飲みながら答へ……

「…………ふっ！」

片手で瓶を握り、破裂音と共に潰した。そして、天井からぶら下がった4枚の畳の前に立ち空手の構えをとり……

「ちえりやああああ！」

気合いと共に抜き手を畳に突き込んだ。殆ど見えない手捌き……
どんだん畳に穴が開き、そして。

「おおりやあ！！！」

右の前蹴りが、1枚の畳を引き裂いた。

「…………！！！」

兼一は、その前蹴りをじっくりと見た。

「へっ！こんなもんだな……これでいいか？ガキ？」

「…………ええ、ありがとうございます」

どこか得意気な逆鬼は兼一に話しかけた。兼一は引き裂かれた畳を見た後、逆鬼にお礼を言って頭を下げた。

「ふむ、そろそろ3時じゃな……兼ちゃんや、道場に行くぞ」

「え、あ、はい（け、兼ちゃん？）」

兼一は長老に呼ばれ、一緒に道場にむかった。

「あ、兼一さん！どこにいらしてたんですか！？いつの間にかいなくなつてて驚きましたですわ！」

「ははは、すいません美羽さん」

道場には美羽がいてプリプリと怒っていた。

「まあ、いいですわ……さて皆さん、おやつですわよお」

美羽の声かけに集まる達人たち。さつき会った人たちだけからするに、人数は長老を入れて6人のようだ。

「さて、丁度集まったことだし、全員の紹介をしようかの」

梁山泊の達人たちが全員の集合したところで、長老は兼一に紹介を始めた。

「まずは……さつきも会った、逆鬼君じゃ」

「へっ……」

喧嘩100段の異名をもつ空手家！逆鬼至緒！！

「次にムエタイのアパチャイ」

「あはばば」

裏ムエタイ界の死神！アパチャイ・ホパチャイ！！

「そして馬……あの帽子をかぶった男じゃ」

「よろしくね」

あらゆる中国拳法の達人！馬剣星！！

「今度は柔術家の秋雨君」

「さつきぶりだね」

哲学する柔術家！岬越寺秋雨！！

「後はあの刀を背負っているのがしぐれ」

「……」

剣と兵器の申し子！香坂しぐれ！！

「そして長老のわし！一人所用で出とるが……これで全員じゃ」

「は、はあ……」

全員の説明が終わり、茶をすすする長老。

「あ、ボクは白浜兼一と申します」

「私のお友達ですわ！」

兼一は全員に自己紹介し、それに続く美羽。周りからの反応はよろしくねーや、あば！や、へっ！等、色んな反応が返ってきた。

「さて、少し聞いていいかな？」

「あ、はい！なんですか？岬越寺さん」

兼一に近付き、話しかける秋雨。

「白浜君……君は、どんな武術をしているんだい？」

「たしかに、中々やるようね」

「あばばば」

兼一に質問する秋雨。その質問に便乗するように話しかけてきた馬とアパチャイ。

「あ、えっと……流派とかは無いんですが、足技主体の武術です」

兼一は秋雨の質問にしどろもどろに答えた。

「ふむ……君ほどの実力は独学ではないのだろうか？教えた人は？」

続けて質問する秋雨。遠くにいた逆鬼や長老も兼一の近くに寄ってきた。

「えっと……戦う料理人、て言えば分かりますか？」

「戦う料理人……ああ、あの！」

「おお、戦う料理人か！オレも知ってるぜ！」

兼一の説明に思い出したと言わんばかりに手を叩く秋雨。逆鬼もその人物を知っているようだ。

「たしか……戦う時は手を一切使わず足だけで敵を圧倒し、女性には絶対に攻撃しないと聞くが」

「しかも、戦争地域や被災地に単身で乗り込み、戦争孤児とかに無償で料理を振る舞うんだろ？噂では、中々美味いらしいじゃねえか」

「ああ！おいちゃんも思い出したね！無類の女好きで、ところ構わずナンパしてるって男ね」

「……………はい、その戦う料理人です」

秋雨と逆鬼、馬の説明を聞き、頭を片手で押さえながらうつむく兼一。

その背中にはどこか影がかかっていた。……………おそらく馬の説明のせいだろう。

「ほっ、そうかあの男の弟子かの！わしも会ったことがあるし、料理も食べたことがある」

「え……………」

長老の言葉に反応し、兼一は顔を上げて長老を見た。

「い、いつですか!？」

「たしかあの男が兼ちゃんぐらいの歳の時かのお？」

「あ……………そうですか……………」

長老の言葉に残念そうに落ち込む兼一。

「会った時に料理を作ってもらったがの、それはそれは……………今まで食べたことが無いほどに美味かったわい！」

「あ……………ありがとうございます！」

落ち込んだ顔が一転、自分の事のように喜ぶ兼一。長老の言葉がとても嬉しかったようだ。

「私も会ったことがあるよ……………たしか2年前ぐらいだったかな？」

「……………!!! 本当ですか!？」

秋雨の言葉に驚き、秋雨の方を勢いよく振り向く兼一。

「い、いったいどこで……………ちっ」

兼一が質問しようとしたとたん、ポケットの中から携帯電話の着信音が鳴った。

「……………すみません、ちょっとよろしいですか？」

「ああ、構わんよ」

兼一は携帯を開き、電話の相手を確認した後、秋雨に許可を得てから道場を出た。

「……はい。……今日ですか？……はい、場所は？……ああ、またあそこですか……はい……はい、分かりました今から行きます」

電話が終わり、携帯を閉じて道場に戻る兼一。

「すみません！バイトが入っちゃって……今日はもう帰ります」

「ええ！？もう帰ってしまったるんですの？」

「ごめんなさい美羽さん……」

美羽は残念そうな顔をし、兼一はそんな美羽に謝った。

「今度また来ますから……岬越寺さん！今度さっきの話を詳しく教えてください！」

「ん、分かった」

「それでは皆さん！お邪魔しました！」

兼一は梁山泊の達人たちに一礼し、玄関にむかった。

「あば！あの門重いからアパチャイが開けてあげるよ！」

「ありがとうございます、アパチャイさん」

心優しき大男、アパチャイは門を開けるために兼一と一緒に玄関にむかった。

「あ、待ってくださいまし兼一さん！」

それを追いかける美羽。道場には達人たちだけが残った。

「先ほどの顔……」

「ふむ……」

秋雨は兼一の顔つきに何かを感じ、長老は顎髭を撫でる。

「うん、今の顔はまるで……」

「……」

眉毛に隠れた目を鋭くする馬、いなくなった兼一の方を黙ったまま見つめるしぐれ。

「ああ、あれは……」

全員の考えに同意する逆鬼。

去っていく時に見せた兼一の顔つきは……

「あばー！」

「ありがとうございます！ではさようなら」

「はい、さようなら兼一さん！」

「あばば〜」昨日来やがれよ〜」

「アパチャイさん！」

「ははは……それでは」

まるで……

「ふう……さてと」

門が閉まり、一息つく兼一。ズボンのポケットから何かを取り出した。

「行くか」

兼一が取り出したのは何も装飾されていない、黒い皮の手袋だった。

それを両手にはめる兼一。

戦いに赴く武術家の顔だった。

BATTLE7 (後書き)

やっと梁山泊の達人全員出せました！

…… 凄く苦労しました。

それによつやくコミックス1巻分書けました！所々省いてますが…

…ま、細かいことは(以下略)

BATTLE 8 (前書き)

総アクセス数48,000突破！お気に入り登録200件突破！！
本当……感謝感激です！

しぐれの口調を指摘されましたが……原作1巻を見ると、しぐれの話し方が今の口調と違うんですよね（苦笑）

迷ったあげく、漫画通りのセリフにしてしまいました（泣）

今度からは今の口調にしていきたいと思えます！

ご指摘ありがとうございます！

BATTLE 8

「ふああ……眠い……」

「大丈夫ですか？兼一さん」

今日は月曜日、休日明けで体がダルい学生たちを太陽の光が容赦なく照らす、快晴の朝。

そこに眠そうに欠伸をする兼一と心配そうにしている美羽がいた。

「大丈夫です……ちょっとバイトが忙しかったもので……ふああ」

「大変ですわね……」

欠伸混じりに答える兼一。目の下にはうつすらと隈が出来ていた。

「ま、授業中寝るから……問題無いですよ」

「いや、授業は寝るためのものじゃない気が……しかも今日は安永先生の授業がありますわよ」

「我が眠りを妨げる者は、たとえハゲでも許さ……ふああ」

「くすくす……」

授業中寝ると欠伸をしながら宣言する兼一に、くすくすと笑う美羽。

「はあ……今日1日は平和でありますように……ふああ」

学校の正門に着き、晴天の青空を見ながら言う兼一。空には雀が2匹、仲良く飛んでいた。

「あ、し、しし、白浜君！」

「ん？……あ、泉さんおはよう」

「お、お、おはよう！」

教室に入り席に座ろうとした瞬間、眼鏡をかけた少女……泉が話しかけてきた。

頬を赤く染め、どもりながら挨拶をする泉。

「あ、あのね、白浜君……」

「ん？どうしたの？」

後ろで手を組み、もじもじとしながら話す泉。

「そのね、あの……こ、今度の日曜日暇？」

「へ？ああ……多分、暇かな？」

「そ、そうなんだ！」

兼一の返事に泉は明るい笑顔になり喜んだ。

「あのさ……だったら……今度の日曜日……」

泉は後ろで組んでいた手を強く握る。その手にはチケットが2枚握られていた。

「一緒に……映画」

覚悟を決めた泉、デートに誘おうとした瞬間……

「席に座れえ〜！」

「ひゃっ〜!!」

安永が教室に入り、驚いた泉は兼一を誘う事が出来なかった。

「し、白浜君！また後で〜!!」

「あ……行っちゃった。ふああ……ね、眠い」

朝のホームルームを始めた安永、だが兼一は話を聞かず……

「……ぐう……ぐう」

腕を枕にし、顔をうつ伏せにして眠ってしまった。

「……よし、じゃ日直〜」

「きりーっ、れーい」

朝のホームルームが終わり、騒がしくなる教室。
終わったとたん泉は兼一の方を見た。

「しら……あ、寝てる……」

だが、兼一は気持ちよさそうにぐっすりと寝ていた。

「しょぼぐん……」

デートに誘えなかった事に落ち込む泉。

「どうした？泉」

「あ、姫野ちゃん！」

そんな泉に話しかける黒いロングヘアに頭にカチューシャを着けた少女。

「なんだ、誘えなかったのか？」

「うっ……だつてえ……」

彼女の名は姫野真琴、ナギナタ部。兼一と同じクラスで泉の友達だ。

「誘おうとしたけど……白浜君が」

「ん？ああ、白浜寝てるな……起こせば？」

「な、だ、ダメだよお！せっかく気持ちよさそうに寝てるのに……」

「……たしかに気持ちよさそうに寝てるな」

姫野の意見に手をバタバタとさせ断る泉。

姫野が兼一の方を見ると、よだれをたらしながら寝ている兼一の姿。

「……ぽー」

「おい、泉？泉！戻ってこい」

兼一の寝顔を頬を赤らめながら見続けている泉。

「まったく……（惚れてるねえ）まあ、たしかに白浜は顔は悪くないが……」

ちらつとまた兼一の寝顔を見る姫野。

「（ま、私には関係無いか……泉の恋の応援をしてあげよう！）」

姫野はグッと右手を握り、決心した。

「……いい加減に戻りなさい！」

「あいた！……うう、ヒドイよ姫野ちゃん」

姫野にチョップされた泉は、叩かれた箇所を撫でながら席に戻っ

た。

「よし！昼休みだ！泉、次こそは誘えよ」

「う、うん！が、ががが頑張って！」

「いや、頑張るのはお前だぞ……」

昼休みのチャイムが鳴り、ガヤガヤと騒がしくなる教室で泉と姫野は話していた。

「さて！行け、泉……！」

「ら、らじゃー！……ってあれ？いない」

「へ？」

気合いを入れて話しかけようとした泉だが、兼一はもういなくなっていた。

「……しよぼぼくん」

「あ、だ、大丈夫だって！絶対どこかにいるんだから、探しに行くぞ！」

「あ、待ってよお」

落ち込んだ泉を慰め、兼一を探しに行く姫野。そんな姫野を慌てて泉は追いかけていった。

「いないなあ……」

「いないねえ……」

場所は屋上。何人が生徒がいるが、どこにも兼一はいない。

「仕方ない、昼食にするか！」

「……うん、そうだね！放課後にでも誘うよ！」

「その意気だ！」

泉と姫野は話しながら網のフェンスの近くに歩いていった。

「……あ！」

「ん？……げ」

泉がふと下を見ると、何かを見つけ声をあげた。

姫野はその声に気付き、その視線の先を見るとそこには……

「最悪だ……」

ベンチに座る美羽と兼一。楽しそうに会話しながら昼食を食べていた。

「……あの2人って、付き合ってるのかなあ？」

「う……」

暗い表情になる泉。何て声をかけて良いか分からず、言葉を失う
姫野。

「（最悪だ……どうしよう）」

頭を抱える姫野。どうしようか迷っていると……

「てめえら!!どっか行きやがれ!!」

「!!」

いきなり屋上の扉が開き、男子生徒が5人入ってきた。

絡まれないように逃げる生徒たち、姫野と泉も逃げようとしたが

……

「ん?おいてめえ!あの時の!!」

「え……ひ、ひい!!」

ある1人の男子が泉に話しかけてきた。

坊主頭に右頬に湿布を貼った男。この間兼一に飛び蹴りされた男だった。

「あいつのせいで佐々木が入院したんだぞ!!」

あの時顎を蹴り抜かれた男は佐々木と言うらしく、あの後入院したようだ。

「おい、どうした……」

「あ、筑波さん!」

後から来た体格の良い黒髪の男。空手部副将の筑波だ。

「聞いてください!俺と佐々木を蹴った男は、この女の知り合いなんです!」

「……ほう」

坊主頭は筑波に説明し、興味深そうにする筑波。

「おい大門寺!この女を捕まえろ」

「押忍!!」

「きゃああ!」

5人のうちの筋肉隆々の男、大門寺は筑波の命令通りにし、泉の腕を掴んだ。

「泉……! ……きゃっ!」

泉を助けようとした姫野は、筑波に首を掴まれた。

「……お前もこいつの知り合いか」

「がっ……あ……」

首を絞められ、苦しそうにする姫野。

「お前に少し……して貰いたいことがあるんだが……」

筑波は姫野の首を絞めながら、にやりと口角を上げて笑った。

BATTLE 8 (後書き)

オリ展開です……原作での空手部の人たちの話は、こういう形にさせていただきました。

何か気になるところがありましたら、遠慮なくご指摘お願いいたします！

BATTLE9 (前書き)

総アクセス数67,000、お気に入り登録数270件突破！
本当にありがとうございます！

……GW中に10万越えたら記念に何か短編を書こうかしら？

BATTLE 9

「ああ……お腹いっぱい。さて飴はっ」と

「兼一さん、いつもその飴舐めてますわね……それなんですの?」

「ん、ああ、これはチュッパチョップスです」

「……………え?」

「だから、チュッパチョップスです」

昼食を食べ終えた兼一と美羽。食べ終わった兼一は制服のポケットから棒付きの飴を取りだし、口に食わえた。

「……………食べます?まだありますよ」

「は、はあ……………いただきますすわ」

兼一はポケットから違う飴を取りだし、美羽に渡す。

「……………あ、コーラ味ですわね」

コロコロと飴を舐める美羽。渡された飴はコーラ味だった。

「基本的にコーラ味しか買わないんですよ。他にもソーダとかバナナチョコとかマグロとかコーヒーとか……………色々種類があるんですよ」

「へえ〜そんなんですの……あれ？ま、マグロ？」

指を折りながら数えて教える兼一。美羽は明らかに飽きしてはダメなものに反応する。

「もう舐めるのが癖になっちゃって……常時ポケットに入っていないと落ち着かないんですよ」

と、苦笑いしながら言う兼一。ポケットにはまだストックがあるようだ。

「……ん？あれは」

「ほえ？……あ、たしか同じクラスの姫野さんですわ」

兼一と美羽はこちらにむかって歩いてくる姫野に気付いた。姫野は俯き、右手で首を押さえていた。

「ねえ白浜……ちょっと一緒に来てくれない？」

「え？」

少し離れたところから話しかける姫野。突然の事に気の抜けた返事をする兼一。

「いいけどなんで？」

「……少し話したい事があるんだ」

俯いていて顔が見えないが、雰囲気からするに大事な用らしい。

「……分かった。じゃ、ちょっといつてきますね」

「あ、はいですわ。じゃあお弁当箱は教室に運んでおきますので」

「ありがとうございます。で、姫野さんどこに行くんですか？」

「……屋上。着いてきて」

そう言って姫野は後ろをむき、歩き出した。

「……………」

「……………」

黙って歩く2人。姫野が少し離れて歩いているため、兼一からは顔が見えない。姫野はさつきから右手で首を押さえていた。

「……ねえ？話って何？」

「……今は言えない。」

「……なんで？」

「……恥ずかしいからよ」

静かな雰囲気になんか耐えきれず、話しかける兼一。だが姫野はそっけなく答える。

返ってきた返事は、告白する前の女子みたいだが、雰囲気からするに違うだろう。

「……………」

兼一は鉛をコロコロと舐めながら黙って着いていった。

「……………」

階段を登り、屋上の扉の前に着いた。

姫野は何も言わず、黙って扉を開けた。

「……………連れてきたわ」

「おう、ご苦労」

そこにいたのは6人の男子生徒、そして……………

「早く泉を離して！」

大門寺に腕を掴まれている泉だった。

「……………なるほどね」

兼一はすぐに理解した。おそらく姫野はこの男子生徒に泉を人質にされ、兼一を連れてくるように言われたんだろう。

「……ごめん」

姫野はポツリと兼一に謝った。

「……泉が捕まって……白浜を連れてこなかったら泉を殴るって言われて……」

ポロポロと泣き出し、その場に崩れ落ちる姫野。コンクリートの地面に、1滴の涙が落ちた。

「ひっく……白浜に嘘ついて……ここまで連れてきて……ひっく、最低だよな……ごめん……ごめんね」

泣きながら謝る姫野。眼から涙を流しながら兼一を見た。

「……！」

兼一は姫野の首に手の痕を見つけた。痛々しく青くなった痣。

「お前が白浜か？」

白浜に話しかける1人の男……筑波だ。

「お前、俺の後輩2人を蹴って佐々木を病院送りにしたんだろ？」

口角を上げて笑いながら聞く筑波。

「てことはお前強いよな？……て、おい！聞いてんのか!？」

兼一は筑波の言葉に反応せずに姫野に近寄り、姫野の前でしゃがんだ。

「え……あ……」

泣いてる姫野の首にある痣を撫でた後、慰めるように頭をポンポンと軽く叩く。

「へ……はぶっ！」

驚いて軽く開いた姫野の口に、兼一は食わえていた飴をいきなり入れた。

「……!?!」

突然の事に泣くのを止める姫野。口にはコーラの味が広がっていた。

「（か、かか間接キス!?!）」

姫野はあまりの事に戸惑い、間接キスに気付き顔を赤らめた。

「姫野さん」

「あ、ひゃ、ひゃい！」

突然兼一に呼ばれた姫野は驚き、変な返事をする。

「……ちよっと待っててね」

ニコツと微笑みかけ、兼一は筑波の方を見た。
その微笑みにドキツとする姫野。だが、次に見た顔は……

「おい、姫野さんの首を絞めたのはどいつだ？」

怒りに染まったものだった……

「俺だよ」 兼一の質問に答える筑波。

「……そうか、なら」

右足の爪先を地面に軽くトントンと蹴った後、鋭い眼差しで筑波を睨む兼一。

「……てめえだけは絶対に許さねえ……」

兼一は吐き捨てるように筑波に言った。

「ふん……良い目だな。まあ、俺と戦う前にこいつらを倒してからだな」

「へへへ……」

「今度こそ絶対ぶつ殺す……!!」

筑波の言葉を聞き、4人の男は兼一に立ち塞がるように並んだ。

「はん……そんなクソ雑魚なモブキャラ共で勝てると思ってんのか？」

「んだとこらあー!!」

「なめやがって……ぶっ殺す!!」

「も、モブキャラ……」

「ぶん殴ってやる!!」

兼一の挑発に乗る4人。1人ショックを受けてるようだが……気にしないでおこう。

「まずはお前の实力を見せてもらおう……やれ!!」

「おおおお!!」

「おらあああ!!」

「モブ……モブって……」

「死ねやああ!!」

筑波の命令に従い、兼一にむかって走り出した4人。

「おらあ!!……あれ?」

「おせえんだよ……」

1人の男が右の正拳突きを兼一に放った。だが、兼一はそれを躲し、後ろに回り込んだ。

「この野郎……へ？」

「……」

後ろから右フックを放ってきた男の攻撃を頭を下げた兼一。

「しっ……！」

「がっ……！……いつて……！」

兼一はその状態で後ろを振り向きながら回し蹴りをし、右フックをしてきた男の両足を蹴った。

両足を蹴られた男はバランスを崩し、後ろに倒れる。

「この野郎……！」

「……」

坊主頭の男の右の上段蹴りを上体を後ろに反らしながら躲す兼一。そのままバク転をし、腕の反動でバク宙をした。

「ぐえっ……！」

「ちょっと失礼」

2回空中で回転した後、倒れた男の腹に逆立ちの状態で着地する兼一。

「モブって言うなあああ!!」

そんな状態の兼一にむかって叫びながら走ってくる男。それに続き、坊主頭と残りの1人が殴りかかってきた。

「食らいな……」

兼一は逆立ちのまま両腕を交差した後、手を支点にその場で回転し……

「パーティーテーブルキックコース!!」

周りの男たちに何発も蹴りを浴びせた。

「ぎええええ!!」

「ぐはぁっ!!」

「ぶえっ!!」

「もぶっ!!!!」

顔や腹などを蹴られ、吹き飛ばる人。腹に乗られた男は、回転する手に腹を捻られ、苦しそくに叫んだ。

「オマケだ……!!」

蹴り終えた兼一は肘を曲げ、腕をバネにし高く飛び上がった。

「串焼き《プロシエツト》!!」

「がっ……はっ……！」

兼一は落下しながらコマのように回転し、倒れている男の腹を貫くように右足で踏みつけた。

蹴りの威力に白目をむいて気絶する男。他の男たちも白目をむいて気絶していた。

「ほう……おい、大門寺！次はお前が行け！！」

「お、押忍！！……どけ！！」

「きゃっ！！」

兼一の実力に感心した筑波は大門寺に命令する。大門寺はその命令を聞き、泉を掴んでいた腕を力づくに押し、泉を突き飛ばした。

突き飛ばされた泉は地面に崩れ落ちた。

「！！」

それに気付いた兼一は、大門寺にむかって走った。

「見よ！この筋肉を！！中学ん時からボディービルのジムに通った最強の鎧！！」

大門寺は上半身裸になり、自慢の筋肉を見せつけた。

「俺の名は大門寺！この筋肉に勝てるかモヤシ野郎！！」

「てめえの名前なんか聞いてねえよクソ筋肉達磨!!」

走りながら怒鳴る兼一。疾風のような速さで走る兼一は、その勢いそのまま飛んだ。

「なっ!!」

トロワシエム
「三級……」

いきなり飛んだ兼一に驚く大門寺。兼一は両足を大門寺にむけ……

「挽き肉!!」
アッ

「ぐおおおお!!」

大門寺の体に連続で高速の蹴りを打ち込んだ。
その蹴りの嵐に顔の前に腕をクロスして構え、耐える大門寺。

「てあっ!!」

蹴り終えた兼一は蹴りの反動で高く上に飛び上がった。

「……中々効いたが、俺の筋肉には勝てん!!」

「!!」

蹴りを受けきった大門寺は、腕を開いて叫んだ。
身体中に靴の跡が出来ているが、ほとんど無傷のようだ。

「ちっ……だったら」

あまり効いていない大門寺に舌打ちをし、空中で体勢を立て直した。

「…………ふっ！」

体勢を立て直した後、兼一は前方に1回、2回と回転し始めた。重力により、回転しながら落下する兼一。

「無駄無駄無駄あ！！俺の筋肉には勝てないぞおお！！」

大門寺はボディビルダーの人がやるポーズを決めながら叫んだ。

「…………めえには、さっきから言おうとしてたんだがな」

回転しながら話す兼一。体が回転する度にスピードが上がる。

「なんだあ！？」

回転しながらこちらにむかってくる兼一に答える大門寺。兼一は5回転した後、勢いのまま大門寺にむかって……

「劣化…………」

「むっ！！」

「コンカッセ粗碎！！」

右の踵を垂直に降り下ろした。

「ぐっ！！ぐはああ！！！」

危険を察知した大門寺は、頭の上で腕をクロスにし構え、ガードしようとしたが、蹴りの威力に負けて地面に叩きつけられた。

「暑苦しいんだよ、その筋肉」

無事に着地した兼一は、気絶している大門寺に言った。

「……さて、大丈夫？ 泉さん」

「へ！？ あ、うん、大丈夫」

地面に座り込んだままの泉に話しかける兼一。突然話しかけられ驚く泉。

「よかった……じゃあ、姫野さんのところに行っててくれるかな？」

「あ、はい！」

泉は兼一の言う通りに姫野のところへ走っていった。

「……後はてめえだけだ」

兼一は筑波の方を睨みながら言った。

「……ふっ」

筑波はその言葉に口元をにやつかせながら笑った。

BATTLE9 (後書き)

戦いの描写が難しすぎる！(汗)

というか三人称が上手く書けない……文才無くて申し訳無いです……
問題がありましたらご指摘やアドバイス等、よろしくお願い致します！

BATTLE10 (前書き)

総アクセス数80,000越えました!

この調子で行ったらGW中に10万越える気がする(汗)

本当……皆さんに感謝です。

BATTLE 10

「……すけい」

姫野は兼一のアクロバティックな蹴り技を見て、啞然としながら言った。

逆立ちしながら回転して相手を蹴り倒す、嵐のような速さでの連続蹴り。

漫画やアニメでしか見たことの無いような技ばかりだった。

「（泉の気持ちがあったわ……）」

姫野は泉がなんで白浜に惚れたのかが分かった気がした。

「（あんな演舞のような蹴りで助けられたら、そりゃあ惚れるよな……それに）」

ちよつと待っててね。

「……！！！！！！」

姫野は兼一の微笑みを思いだし、顔を赤らめた。

「（ば、ばばバカ！！な、何思い出してんのよ！あ、あんな微笑みなんて……微笑みなんて……）」

てめえだけは絶対に許さねえ！

「……！！！！！！」

兼一の筑波を睨み付けた時の顔を思い出した姫野。頭からボンツと煙が出て、顔がトマトのように赤くなる。

「（かつこよかったなあ……あれ、私のために怒ってくれたんだよなあ……男の子の本気で起こった顔、初めて見たなあ）」

顔から煙が出るほど顔を赤くする姫野は、飴をコロコロと舐めた。

「（そ、そういえばこの飴あいつの……や、ヤバイヤバイヤバイ！お、乙女か私はあ！？）」

ばくばくと鳴る鼓動、姫野は目を両手で押さえ、ブンブンと頭を横に振った。

「（こ、こんなのただの飴だろあ！？べ、べべべ別に大したこと無いしーいや、美味いけど……って違うー！）」

頭を振るのをやめる姫野。髪の毛がボサボサになり、カチューシヤがずれていた。

「（わ、私は泉の恋の応援をするって決めたんだからー！って、誰に言い訳してんだあ！？……こ、これじゃ私が……）」

いまだに真っ赤な顔で兼一を見る姫野。兼一は、大門寺を倒した後、筑波の前に立っていた。

「（まるで……）」

ドクンドクンと高鳴る鼓動。姫野は胸に手をあて、兼一を見つめ

た。

「（まるで……私が……白浜に）「姫野ちゃん!!」……うひゃい!!」

姫野はこちらに走ってくる泉の声に驚き、変な返事をした。

「大丈夫!? 私のために……ごめんね」

「え、あ、うん、大丈夫だよ……無事でよかった」

泉は心配そうに言った後、眼を涙で濡らしながら姫野に謝った。怪我がない事が分かった姫野は、安心したように微笑んだ。

「……あれ? 姫野ちゃん、なんか顔赤くない?」

「ふえ!? あ、赤くないし! 気のせいだし!!」

「……?」

顔が赤いことに気付く泉、指摘されて焦りながら否定した姫野。

「あ、ほら! 白浜が戦うようだよ!」

姫野は誤魔化すように兼一の方を指差した。

兼一は筑波の前に立ち、右足の爪先でトントンと地面を蹴っていた。

……一方、兼一の方はというと。

「残りはてめえだけだな」

地面を軽く蹴った後、筑波を睨み付けながら言った。そして筑波にむかって歩き出した。

「やっぱり……お前強いな。久しぶりに歯ごたえがありそうだ」

筑波はニヤリと笑いながら指をボキボキと鳴らした。

「いくぞ！」

左手を顎の前にまで上げ、体を半身にする構えをとる筑波。足でステップを踏み、兼一にむかって……

「せい！！」

右の正拳突きを放った。

「ふっ！！」

兼一は正拳突きを左に首を曲げて躲し、そのまま左の上段蹴りを浴びせた。

「っと！あぶねえ」

「ちっ……おらっ！」

右の上段蹴りに反応して左腕で防御する筑波。
ガードされた兼一は舌打ちをし、右足を戻してからすぐに、左足で筑波の右足を蹴った。

「おつとおー！」

筑波は兼一の左の下段蹴りをバックステップで躲した。

「ククク……おもしれえ！やっぱり強いな」

構えを解き、笑い出す筑波。

「ククク……強いやつがいるとほっとけねんだよ……それが女でも、子どもでも、じじいでもなあ」

「……………」

兼一は筑波の言葉に反応し、ピクリと体が動かした。

「てめえは俺が今まで戦ってきた中で一番強い……期待通りの男だ」
嬉しそくに笑い、右手を握る筑波。

「さあて、続きをしよう」「おい、聞いていいか？」「……あん？」

顔を俯きながら聞く兼一。兼一の雰囲気が変わった。

「……………てめえが今まで戦ってきた中で、女性の人はいるか？」

兼一の纏う気迫が、内に凝縮していくのが分かる。

「……ああ、いるぜ。たしか、キックボクシングだったかな？……
だが、期待はずれだったな。腹を1発殴ったら泣きながら謝ってきたよ」

筑波は昔の事を思いだし、兼一の質問に答える。

「ムカついたんで、顔とかボコボコにしてやったなあ……ククク、
あの時の顔は最高に面白かった」

「……………」

昔の事で思い出し笑いをする筑波。その笑みは不気味なものだった。

兼一は筑波の言葉に何も言わず、黙っていた。

「……………そうか」

ポツリと喋る兼一。纏う気迫は全て内にしまい、気迫とは別の何かを纏った。

「……………」

ゾクリと寒気がする筑波は、反射的に構えた。

兼一は俯きながら制服のポケットに手を入れ、そこから黒い皮の手袋を出した。

「お前はもう許さねえ……レディに手を出す奴は」

取り出した黒い皮の手袋をはめ、筑波を睨む兼一。

「俺がぶっ潰す……！」

その眼には、静かなる殺気が籠っていた。

「くっ……な、なんだその手袋は!？」

「……これはな、俺が本気の時に使う手袋だ。本気で戦うと、掌が摩擦で擦りむけるんだ」

筑波の質問に丁寧に答える兼一。手袋をはめた右手を握ったり開いたりした。

「料理人は手が命だからな……守ってやらねえと」

「料理人……だと？ 武術家じゃないのか？」

「俺は、戦うコックだ……おい、クソ野郎。なんで俺がこんなにてめえに教えてやってるか分かるか？」

「……？」

にやりと不敵に笑う兼一。右の拳を筑波にむけ……

「てめえへの冥土の土産だよ」

親指を下にしながら言った。

「てめえ……！ぶつ殺す……！」

兼一の挑発にキレた筑波は、右の正拳突きを放った。

「おせえっ……！」

さっきのように左に首を曲げ躲し、右の上段蹴りを筑波にむけて放つ。

だが、そのスピードはさっきよりも速く、鋭かった。

「首肉！^{コリエ}」

「ぐっ……がっ……！！」

右の上段蹴りは筑波の喉に当たり、苦しそうにする筑波。

「肩肉！^{エポール}」

「ぎっ……！！ああああっ……！」

筑波の喉を蹴った右足を伸ばしたまま、肩に踵落としかました。鈍い音を立てて折れる鎖骨。痛みに耐えきれず叫ぶ筑波。

「背肉！^{コートレット}鞍下肉^{セル}……！」

「がっ……！！だっ……！！」

筑波の後ろに回り込み、逆立ちをする兼一。腕を交差し、勢いよ

く回転しながら筑波の背中と、背中の下辺り……鞍下を連続で蹴った。

兼一の掌がコンクリートの地面に擦れる。素手なら砂利で手が血塗れになるほどの回転を、手袋が守る。

「ふっ！……ポワッリヌ胸肉！」

「ぐっ！……！」

腕をバネにし、反動で飛び上がった兼一は、筑波を飛び越えて足から着地。

後ろを振り返りながら左足で筑波の胸の中心を蹴り抜いた。

「ジゴもも肉！」

「だっ！……！」

蹴った左足を地面に着け、左足を支点に筑波の左大腿部を右足で思いきり蹴り抜いた。

筑波は蹴りの威力に右足から崩れ落ちた。

「がっ……あ……で、でめ……えっ……！」

喉を蹴られた筑波は、声を震わせながらもなんとか立ち上がった。だが、右足がガクガクと震え、生まれたての小鹿のようになっていた。

兼一は蹴り抜いた右足を地面に着き、力を込めた。その後、左足の膝を曲げて体を丸めた。

「……食らえっ！」

筑波に背中をむけた状態で叫ぶ兼一。
右足を力一杯踏みしめ、筑波の腹部に……

「や、や、め、っ……!!」

「羊肉ショット《ムートンショット》!!!!」

強力な左後ろ蹴りを見舞った。

「」

声にならない声をあげる筑波。メキメキと腹にめり込む兼一の左足。

「……飛べっ!」

兼一が叫んだ瞬間、筑波は勢いよく吹っ飛んだ。
地面に平行に吹っ飛ぶ筑波。

「ふう……」

筑波を蹴り抜いた兼一は、吹っ飛んでいった筑波に背をむけ、一息つきながら手袋を外した。

「がっ!!」

兼一の後ろで網のフェンスに背中からぶつかって止まった筑波。
そのままズリズリと下に下がり、前のめりに地面に倒れた。

「てめえには、クソ不味い敗北の味がお似合いだ……クソ雑魚が」

兼一は振り向かないで気絶した筑波に言った後、姫野たちのところへ歩いていった。

BATTLE 10 (後書き)

筑波撃破!!

兼一の連続攻撃を書くのが楽しかったです(笑)

兼一の手袋の理由はあんな感じですよ……

達人級なら大丈夫だと思いますが、兼一には厳しいと思います、こつこつい
う勝手な設定を作りました(汗)

もし気分を害された方がいらっしやいましたら、ここで謝ります……

ごめんね (・>)<

(・(O)=O) (・<・)

BATTLE 11 (前書き)

GW中に10万アクセス?ははっ、無理に決まってるじゃん!調子にの……10万越えてるう!?

というわけで10万越えました。本当、感謝感激です……
読んでいただき、ありがとうございます!

BATTLE 11

「さて……大丈夫？」

筑波を倒した兼一は、泉と姫野のところまで歩いてきた。

「う、うん！大丈夫だよ！」

「……………」

地面に座ったまま慌てて返事を返す泉に対して、姫野は黙ったまま俯いていた。

「……………姫野さん？」

「……………めん」

「……………？ごめん、聞こえないんだけど……………」

心配した兼一は、姫野に話しかける。姫野はぼそりと何か言ったが聞こえなかったため聞き返す兼一。

「……………白浜ごめん！」

立ち上がり、兼一に頭を下げて謝る姫野。

「お前を騙すような事して……………下手したら怪我しちゃうかもしれないな
かったのに……………」

「大丈夫だよ！ボク意外と強」それでも！！」……」

兼一の言葉に被せるように叫んだ。

「それでも……危ないだろ？……なのに私は……」

「姫野ちゃん……」

頭を下げながら泣き出した姫野を、心配そうな顔で見る泉。

「……だって、そうするしか泉さんの事助けられなかったわけだし、ボクは気にしてないよ」

「……でも、私は白浜に嘘を……」

「ふう……あのね、姫野さん。これは、ボクの知り合いの言葉なんだけどね」

強情な姫野にため息をつく兼一は、昔ある人に聞いた言葉を姫野に教えた。

「その人いわく、女の嘘は許すのが男……らしいんだ」

昔教わった事を思いだし、懐かしそうに笑う兼一。

「だから姫野さんのついた嘘を、ボクは許すよ」

「！」

にこりと微笑む兼一の笑顔を見た姫野は、ドクンと心臓が高鳴っ

た。

「（ああ、この笑顔だ……この笑顔はズルいだろ……反則だ）」

さつきまでの怒りの表情ではなく、いつもの笑顔でもない、安心させるような優しい笑顔。

その笑顔を見た瞬間、顔を赤く染める姫野。

「（まいったなあ……）」

泣き止んだ姫野に安心した兼一は、泉に話しかけていた。

ニコニコと笑いながら話す泉。その笑みは、恋する乙女そのものだった。

「（ごめん泉。私、あんたの応援できそうに無いわ……）」

「姫野さ〜ん！保健室に行つて首の怪我を見てもらいに行きましょう！」

「わ、分かった！今行く！」

だって、これからライバルになるからね！

「すぐ治るようじゃよかったね！」

「まったくだ……これで痕が残ったら最悪だもんな」

あの後保健室に行った3人。姫野の怪我は、1日もすれば治るらしく、湿布を貼るだけですんだ。

今は放課後……泉と姫野は下駄箱の前で靴を履きかえながら話していた。

「それで、泉は白浜を誘えたのか？」

「うっ！いや……その……」

「まだなのかよ」

姫野の質問にどもる泉。姫野はため息をつきながら呆れた。

「だ、大丈夫……！明日……明日こそは絶対……！……多分」

「どっちだよ」

と、漫才のような会話をしながら外に出た。

「……あ」

「……お」

「……ん？」

外を出ると、兼一が飴を舐めながら立っていた。

「し、ししし白浜君！」

「落ち着け泉」

偶然の出会いに焦る泉を冷静に落ち着かせる姫野。

「今から部活？」

「ああ、そうだよ。白浜は？」

「ボクは今からバイトだよ」

泉が落ち着くまでの間、兼一と会話する姫野。

「バイト？なにやってるんだ？」

「喫茶店だよ。喫茶マツエっていうところで働いてるんだ」

「へえ〜じゃあ今度行っていいか？」

「わ、私も！私も行きたい！！」

「うん、いいよ！いつでも大歓迎さ」

仲良く会話する3人……そこに1人の少女が走ってきた。

「兼一さ〜ん！お待ちしましたですわぁ！」

「あ、美羽さん」

走ってきたのは美羽だった。

「じゃ、帰りましょう……あら、お話し中でしたか？」

「あ、いや、その……」

「……」

いきなり来た美羽に戸惑う泉。黙って美羽を見つめる姫野。

「……あのさ？風林寺」

「はい、なんですか？」

口を開いた姫野は、美羽に話しかけた。ニコニコと笑いながら返事をする美羽。

「……お前らって、どんな関係なんだ？」

「ほえ？」

2人の関係について質問すると、キョトンとした顔をする美羽。

「……お友達ですわ！」

美羽は、満面の笑みで答えた。
その答えにホッとする泉と姫野。

「美羽さん……そろそろバイトが」

「あ、すみませんですわ！」

腕時計を見ながら急かす兼一に謝る美羽。

「じゃあ2人共、部活頑張つてね」

「うん！白浜君もバイト頑張つてね」

2人に別れを告げて、兼一と美羽は校門の方へ歩いていった。

「……行っちゃったね」

「……行っちゃったな」

兼一たちがいなくなった後、気の抜けた会話をする2人。

「……ねえ、姫野ちゃん」

「……ん？」

「……負けないからね」

「ん………はいっ!？」

泉の突然の負けない宣言を聞き、2、3秒の間の後に驚いて声をあげた。

「な、なななな、何を言っ……！」

「ふふっ……姫野ちゃん顔真っ赤だよ？」

「……！！！」

泉の言葉を理解した姫野は、顔を真っ赤にした。

「……一緒に頑張る！」

「……！」

明るい笑顔で言った泉……姫野はその笑顔を見てもとに戻った。

「うん、一緒に頑張る！」

つられて笑う姫野。その笑顔は、とても明るいものだった。

「ふふふっ」

「はははっ」

一緒に笑う2人。この瞬間、2人は友達から親友に変わり、そして恋のライバルになった。

「……というか、まずは風林寺さんをどうにかしないと」

「あ……か、勝てる気がしない」

2人仲良く頭をガクツと下げる。

そのまま2人は自分の部活動があるため、トボトボと歩いていった。

「くしゅん…」

「美羽さん……風邪ですか？」

「ふえ……分かりませんですわ……」

BATTLE 11 (後書き)

はい、2人目落としました。

今回は今までにないぐらい出来の悪いものですね……

姫野の性格が分からん……

アドバイスお願い致します(泣)

10万越えたので、短編小説を書きます！

本当にありがとうございます！

INTERVAL 1 (前書き)

と、いうわけで短編です。

10万アクセス突破記念です！前々から書きたかったんですよね
(笑)

これからINTERVALと言うのは短編、BATTLEが本編になります！

それではどうぞ！

INTERVAL 1

「はぁ……暇だなぁ」

とある休日の午後、兼一は家でソファーに座りながらブーツとしていた。

昼食も食べ終わり、皿洗いもしたし、掃除もしたし、洗濯物も干した。

家事のすべてを終えた兼一は、手持ちぶさたな状態だった。

「暇だなぁ……今日はバイトも無いし……はぁ」

ため息をついてソファーに横たわる兼一。

だが、眠いわけでもなく、ただただ天井を見つめた。

「……テレビでも見るか」

テーブルの上にあるリモコンを手に取り、テレビのスイッチをつけた……

「……の天気は晴れ、絶好のお出かけ日和でしょう！それでは、美人天気予報士！ナナミさんのお天気コーナーでした！」

「……次」

チャンネルを変えた。

「……今日未明、戦隊ヒーローで有名なソゲキさんが詐欺容疑で逮捕されました。ソゲキさんは容疑を否認し……」

「……次」

チャンネルを変えた。

「……大食い王決定戦、優勝は、猿山さんです！」

「おおおお！大食い王に、俺はなる！！」

「……いや、もう大食い王ですよ？」

「ん……ああ、そうか」

「……つぎ」

チャンネルを変えた。

「……さあ、始まりました第02回剣道世界大会決勝！日本人代表、謎の緑の二刀流剣士は世界一を取れるのか！」

「……つぎ」

チャンネルを変えた。

「……華道の名人、ロビン・二小山が送る、正しい礼儀作法の時間が始まりました」

「……次」

チャンネルを変えた。

「……スーパー！どうだいこの肉体！」

「まあ、スゴいわ！でもいきなりどうしてこんなにマッチョになったのかしら！教えてフランク！」

「はははっ！しょうがないなあカティは！これはね、このコーラの効果さ！」

「いらね……というか何で海パン？……次」

チャンネルを変えた。

「……大発見です！海底深くの沈没船の中から、アフロヘアの骸骨が発見されました！」

「どんな骸骨だよ……はあ、面白い番組無いなあ」

兼一はテレビを電源を切ったり、ソファーに寝転びながら背伸びをする。

「……そうだ、梁山泊に行こう」

まるで京都に行くようなノリで起き上がる兼一。すぐに梁山泊に行く準備を始めた……

INTERVAL 1 (後書き)

いかがでしたか？笑えていただければありがたいです！

今回の短編で、いくつかの伏線を張りました……気付いた人がいたら、本当に驚きです（汗）

なんか、書くのがすごい楽しかったです……一時間もかからず書いてしまった。

それでは、次の短編は15万アクセスの時に！

何かリクエストがありましたら、感想でリクエストを書いてください。

気に入ったのがあれば書きますので……

BATTLE 12 (前書き)

ここから本編です。

今回から段々とシリアス(?) になっていきます……

ご指摘を受けたので、書き方を変えました！

アドバイスありがとうございます！

BATTLE 12

「よいしょっと……」

とある休日……兼一は黒いワイシャツを着て、首もとにトレードマークの太極バッジを付けていた。

兼一は靴を履いて家の玄関を開けた。
外に出ると、天気予報通り青空が広がっていた。

「……いい天気だなあ」

背伸びして深呼吸する兼一。その首もとには、太陽の光に反射してキラリと光る銀色のロケットペンダントがあった。

「これでよし……」

兼一は玄関の鍵を閉め、ポストの中を覗く。

「……はあ……」

何も入っていないポストを見てため息をついた。

「さて、行きますか」

兼一は気を取り直して梁山泊にむかって歩き出した。

「……お、も、い……！」

梁山泊に着いた兼一は、重い正門を力一杯押していた。少しづつだが開いていく正門。そのスピードはゆっくりだった。

「こ、ん、ち、く、しょうがああ！」

兼一は中々開かない正門にキレ、正門から離れた。……そして。

「猛進……！」

助走をつけた兼一は、正門にむかって……

「猪鍋シュートおおおー！」

飛びけりを放った。

「うっせえぞ！ 誰だ！？」

「へ？」「へ？」

蹴り抜く前に開かれる正門、止まらない兼一は門を通り抜け……

「へぶつー！！」「

門の先の灯笼に勢いよく激突した。

「失礼しました……」

灯笼に激突した兼一は、門を開けた逆鬼と共に道場に歩いていた。

「まったく……少しは近所迷惑とか考えねえのか？」

喧嘩100段、逆鬼至緒！

「すみません、逆鬼さん」

「へっ！」

と、会話しながら歩く2人。そして2人は道場に着いた。

「こんにちは、岬越寺さん」

「ああ、兼一君こんにちは」

哲学する柔術家、岬越寺秋雨！

「あはっ！ 兼一よ！」

「アパチャイさん！ こんにちは」

「あはばー！」

裏ムエタイ界の死神、アパチャイ・ホパチャイ！

「おお、兼ちゃん久しぶりね」

あらゆる中国拳法の使い手、馬剣星！

「あれ？……しぐれさんは？」

「じ……じ」

「うわあっ！ な、なんで天井にぶら下がってるんですか!?!」

剣と兵器の申し子、香坂しぐれ！

「ほっほ、兼ちゃん。よく来たの」

梁山泊を纏める長老。

「皆さんお揃いで……」

梁山泊にいる達人たちは、全員道場にいた。

「あれ？ 美羽さんは……」

「美羽なら今日は部活らしいね……多分5時頃帰ってくるんじゃないかな？」

「そうですか……」

兼一の質問に石を削りながら答える秋雨。

今は4時なので、後1時間程で美羽が部活から帰ってくるらしい。

「あっぱ！ 兼一、今日は何しに来たのかよ？」

煎餅を食べながら聞くアパチャイ。

「今日ですね……岬越寺さんにお話が」

「む、私かね？」

アパチャイの問いかけに答えた兼一は、秋雨に話しかけた。

「はい……ボクの師匠について聞きました」

「……………」

石を削るのを止める秋雨。

「ああ、戦う料理人だったか？ お前、本当にそいつの弟子なのか？」

「はい、その通りです。ボクの武術と料理の師匠です」

「ほっ、料理もね？ ということは兼ちゃんも料理も凄いな？」

「凄いつて訳じゃないですけど……ま、自信はありますよ」

逆鬼と馬の質問に答える兼一。

「……すまないがみんな、少し席をはずしてくれないか？」

「あん？ なんでだよ？」

「……頼む」

石を削る手を止めて黙っていた秋雨は、突然全員にこの場から出るように言った。

「まあ、まあ……ここは秋雨どんの言う通りにするね」

「……」

そう言うってから馬は道場から出た。それに続くように黙っていないくなるしぐれ。

「ちっ、わあったよ……行くぞアパチャイ！」

「あば……」

秋雨の言う通りにいなくなる逆鬼とアパチャイ。

「さて……ではわしも……」

最後に長老が道場から出た。

途端に静かになる道場。兼一は秋雨の近くに正座した。

「……兼一君。君の師匠とは、2年前に会ったと……前に言ったね？」

突然話し出す秋雨。その問いに頷く兼一。

「……あれは今みたいな暖かい春の事だった……私は少し用事があ

って海の方に行っていたんだ。」

「そこはとても綺麗な場所だった。活気溢れる港町で元気に遊ぶ子供たちがいた……平和なところだったよ」

思い出すように話す秋雨の顔は、懐かしそうだった。

「私がフラリと歩いていると、港町から離れたところに診療所があったんだ」

「その診療所に行くと、いい香りがしてね。そこを訪ねてみた……」

ああ？ 誰だお前？

「そこにいたのが、君の師匠……戦う料理人だよ」

いや、いい香りがしたものでね……思わず立ち寄ってしまったんだ。

そうか……あんたも食べるか？

いいのかい？ 見ず知らずの男に……

いいんだよ別に！ ほら入れ！

「彼は見ず知らずの私に料理を振る舞ってくれた……私はあんなに美味しいオムライスは初めてだったな」

ほう、オムライスだったのか……では、お言葉に甘えて。

う、美味い……

ふっ……まあ、遠慮せずに食べてくれ。

ああ、ありがとう……これは君が作ったのかい？

ああ、そうだけ。いけるだろう？

「彼は煙草を吸いながら、嬉しそうに笑っていた」

「はは、師匠らしいや」

兼一は容易にその光景が目には浮かんで思わず笑った。

美味しかった……ありがとう。

お礼なんざいらねえよ。

1つ聞いていいかい？

おう、なんだ？

君は、武術家かい？

……へえ、分かるのか？

まあ、雰囲気だね。しかも君は、達人級だね？

まあな……だけどこんななりじゃあ、もう達人なんて言えねえ

な……

「……そう言った彼の身体には」

「右足と左目が無かったんだ」

「……!!!!」

残酷な事実を話す秋雨に驚く兼一。

「しかも……聞くと彼はもう長くないらしい」

ま、仕方ないだろ……ダメなもんはしょうがないさ。

医者……なんだって？

もって1週間だよ……

どうしてそんな状態に？

「そう聞くと彼は、戦った時に右足と左目を失い、その時に毒を食らったと話していた」

「……………」

あまりの事に言葉を失う兼一。秋雨は話を続けた。

「怪我をしたのはそこから1年前で、今まで頑張っていたが……もうダメらしい」

あんたが気にすることじゃないさ……

「彼は笑っていたが、顔が青かった……」

さて、食ったならもう行ってくれ！ 最後にあんたみたいな人に料理を作れてよかったよ。

「…………無理して料理をしたんだろう……フラフラだった」

大丈夫かね！？

おお、大丈夫大丈夫！ ちょっと目眩がしてな………つたく、煙草吸っただけでこうなるなんてな……

そんな体でそんな物を吸うんじゃない！ 早くベッドに……

了解了解！ じゃ、俺は寝るから……

ならいいが……オムライスをありがとう。なにかお礼がしたいのだが……

いらねえ………と言いたいところだが、少しお願いしたいことがあるんだ。

もし、俺の弟子に会ったら……

「その後彼は奥の部屋に行ってしまった」

「……それで、師匠はなんと？」

「すまなかった……そう伝えて欲しいと言われた」

「……………」

師匠の伝言を聞いて俯きながら黙る兼一。

「……………その1週間後、風の噂で聞いたんだが……………彼は亡くなったらしい」

「……………」

話終えた秋雨はそのまま黙ってしまった。

静かになる道場……………カチコチと時計の針の音が響く。

「……実は、ですね」

俯きながら兼一は秋雨に言った。

「……実は、そうじゃないかとは思っていました」

ポツリポツリと話始める兼一。

「師匠は、いつもボクに手紙を送っていました……ですが、3年前から一向に手紙が来なくなつて……」

俯き、右手をギュツと握る兼一。

「……最後に来た手紙には、海が見える診療所の写真が入っていました」

その診療所が、さつき秋雨が話していたところのようだ。

「……なんとなく……そんな気はしてたんですね……」

「……」

苦笑しながら話す兼一。黙って聞く秋雨。

「……師匠は、昔ボクを助けてくれたんです」

おい、大丈夫かクソガキ。

「ボクに武術を教えてくれて……」

はい、後10分。

「料理を教えてください……」

違う違う！ 白ワインはもう少し後だ！

「そして……」

おい、クソガキ！ こっちに来いよ！

「そして……『僕』を『ボク』に変えてくれました……」

物語は、昔に遡る……

BATTLE 12 (後書き)

次からは兼一の過去編です。

伏線を回収出来るように頑張ります！

BATTLE 13 (前書き)

もう16万アクセス突破してたWWW

早い、早いよWWW

いずれ短編書きます。

今回から過去編です。少々残酷な表現がありますので、ご注意願います。

BATTLE 13

それは、10年前のじわじわと暑い夏のことでした……

引越してきて初めての夏休み、ボクは家族と一緒に旅行に行きました。

「楽しかったね！ お兄ちゃん！」

「うん、そうだね！ お父さん、また遊園地行きたい！」

「ははは、まったく兼一は遊園地が好きだな！」

「ふふふ、また行きましょうね」

「うん！ あ、お母さん！ またお弁当作ってね！」

「分かったわ。また兼一の好きな卵焼き作るわね」

「やったあ！ 僕、お母さんの卵焼き好き！」

「あ、ほのかも！ ほのかも卵焼き好き！」

「あらあら」

「たしかに母さんが作る卵焼きは絶品だからな！」

お父さんとお母さん、そして妹のほのかと一緒に遊園地遊びに行っただんです。

すごく楽しくて……車の中でずっとはしゃいでました。あの頃は楽しかったなあ……

……そんな楽しい時に、事件は起きました。

「 なっ！！」

「 え？ 」

反対車線からボクが乗っていた車にトラックが突っ込んできました。

最後に見たのは……目の前から迫ってくるトラックでした。

「 …………… あれ？ …………… っ、どっ？ 」

ボクが気づいた時には、病室でした。

「 …………… お母さん？ お父さん？ ほのか？ …………… いっ！！ 」

状況が飲み込めなくて、家族を探そうとしましたが、痛くて動けませんでした。

「 あれ？ …………… なんて？ 」

ボクの上半身には、包帯が巻かれていました。

「 あ！ せ、先生！ 兼一君が目を覚めました！」

部屋に入ってきた看護婦さんは、医者を連れてきました。

「目を覚ましたんだね？ 兼一君」

「おじさん、誰？」

「私はお医者さんだよ。君は救急車でここに運ばれてきたんだ」

「え？……どうして？」

「……覚えて、無いのかい？」

その時、ボクの頭の中でトラックが突っ込んできた時の光景が写し出されました。

「……！！！ そうだ！ と、トラックが……トラックが……！！」

「落ち着いて！ 君は事故の後ここに運ばれてきて、すぐに手術をしたんだ。そして君は3日間寝ていたんだよ」

「……お父さんは？ お母さんは？ ほのかは！？ みんな無事なんだよね！？」

「……… 兼一君、君に連れていきたいところがあるんだ」

そう言って医者は、ボクを車椅子に乗せてある部屋に連れていきました。

「え？」

その部屋には、ベッドに寝かされた3人がいました。

「お、とうさん……おかあ、さん……ほの、か？」

「……君の家族だが、運ばれてすぐに亡くなってしまった……最善は尽くしたんだけど、当たりどころが悪かったらしい」

「……み、んな」

3人の遺体は、とても死んだようには見えませんでした。

「……すまない……本当に、すまない……！」

「……」

ボクは信じられなかった……あんなに綺麗なのに、死んでるんだってことが……

「……！！」

「け、兼一君！」

ボクは車椅子から立とうとして、倒れました。それでも、床を這いながら3人のところまで行きました。

「う、うそでしょ？……うそなんでしょ？」

背中から血が出て、包帯が赤く滲みました。痛くても、辛くても、3人のところまで必死に這いました。

「いつ！……がっ！……ねえ、僕もうわがまま言わないから……目を覚ましてよ……」

誰も返事を返してくれませんでした……何度呼び掛けても……何度も、何度も、ナンドモ……

「う、あ……ああ……ああああああアアアアアア！！！！」

叫んだ後、ボクは気絶しました。起きたら、またいつものような普通な暮らしが待っていると願いながら……無理な、願いをしながら……

……
神様に何度もお願いしました。みんなを生き返らせてくれて

……
神様を何度も罵倒しました。なぜボクだけ生き残った！！なぜボクだけ死ななかった！！なぜ……僕だけが、なんで……なんのためにつて……

その時、ボクの中で、何かが、砕けました。

「……………」

それからしばらくして、家族の葬式をしました。親戚が葬式を仕切ってくれたんです。

「あの子が例の？」

「そうそう……可哀想よね……1人になっちゃって」

「しかも預かる人いないんでしょう？」

ボクを預かってくれる人は誰もいませんでした……みんなボクを腫れ物のように扱い、誰もボクを見ようとはしませんでした……

身寄りのないボクは、孤児院に預けられました。

そこで待ち受けていたのは、壮絶な苛めでした。

「てめえ！ キモいんだよ！！」

「いつも笑わないしよ〜！ 俺たちのことバカにしてんのか!？」

「……………」

ボクは家族を失ったショックで感情が無くなってしまいました。

笑うことも泣くこともせず、それが気に食わないと他の孤児院の子どもに苛められました。

それを孤児院の先生は見ても見ないふりをしてました。

食事の時にご飯を捨てられました。

寝る前に腹を何発も殴られました。

トイレの水を飲まされたこともありまして……

「……僕は……」

それでも、ボクは何も言いませんでした。反抗するわけでもなく、ただただされるがままでした。

「……僕は……なんのために……」

「僕は……なんのために生きているの？」

それから月日が流れ、ボクはある日、公園にいました。

「……おなか……すいたな……」

朝食も、昼食も食べていないボクは、空腹を我慢しながらベンチに座っていました。

「……おなかすいた……」

空をボーッと眺めて、空腹に耐えていた……そんな時。

「くっそ……マジム力つく！」

「荒れてるねえ……落ち着きなよ」

2人の不良が歩いてきました。

「ああああ！ むしゃくしゃする！！ くっそ……誰かいねえか……お！」

2人の不良の1人、スキンヘッドの男がボクに近付いてきました。

「おいガキ……あの孤児院の子どもだな？」

「……」

「ちっ……だんまりか……まあ、いいや！ ちょっとこっち来い！」

ボクはその男に連れられ、公園の森の中に入りました。

「おい、ちゃんと見張つとけよ！」

「はいはい……コウちゃん、あんまりやりすぎんなよ?」

「分かってる……おいガキ。俺は今非常にムカついでる! だから殴らせるや!」

「ぐっ!?!」

スキンヘッドはいきなりボクの右頬を殴りました。

「……まだまだだぜ? おらっ!」

「がっ!?!」

スキンヘッドは無理矢理立たせて何度も殴りました。

「おらっ! おらっ!」

「がっ!?!……ぶはっ!」

顔や腹を何発も殴ったり蹴ったり……

「はあ、はあ、はあ……こいつ、中々しぶといな」

「……」

顔が腫れて、口や鼻から血が出ていました。腹を殴られて胃液を吐き出し、地面を濡らしました。

それでも、一切涙は出ませんでした。

「……なんだその目？ ムカつくなっ！」

「があああっ！」

「ちよっ！ コウちゃんやりすぎ！」

「うっせえー！」

スキンヘッドはポケットからバタフライナイフを取りだし、ボクの左目の下を切り裂きました。

血がドバドバと出て、ジンジンと目が熱くなりました。

「こいつのこの目！ ムカつくから抉ってやるー！」

「死ぬって！ それ以上はマズイ！」

「いいんだよ！！ どうせこいつには親がいないんだ！！ 死んだって別に関係ねえだろ！」

そう言っただけにナイフを振りかぶりました。

「（僕、ここで死ぬのかな？ ここで死ねば、みんなに……）」

ボクは諦めてました。むしろ死にたい、そう思っていました。

「（お父さん、お母さん、ほのか……今、行くよ）」

降り下ろされるナイフ……ボクは目を閉じました。

「（……でも、なんでかな？……僕、まだ……）」

でも、ナイフがボクを切り裂く瞬間……

「しにたくない……」

「ぎゃああああ……う、腕がああ！？」

スキンヘッドの叫び声が聞こえました。

「……え？」

その叫び声に、ボクは思わず目を開けました。

「まったく……ガキ相手に何してやがる……」

目の前には腕を押さえるスキンヘッドと……

「ふー……クソ雑魚が」

タバコを吸っている、金髪のヒーローがいました。

BATTLE 13 (後書き)

過去編は2回に分けます。

BATTLE 14 (前書き)

過去編はこれでおしまいです。

俺にはこれが限界だ……

BATTLE 14

その出会いは、奇跡のようなものでした……

「て、てめえ……誰だ!？」

「俺か……そうだな、通りすがりのコックさんだ」

「なめやがってえ……!」

スキンヘッドはその金髪の男性にナイフを刺そうとしてました。

「まったく……マナーがなってねえな」

「なっ!？」

「これでも食らってる……」

金髪の男性はスキンヘッドの攻撃を避けて、懐に入りました。その動きは滑らかで、無駄がありませんでした。

「反行儀キックコース《アンチマナーキックコース》!」

「ぐっはあああ!」

男性はスキンヘッドを下から上に垂直に蹴り、上に蹴り飛ばしました。

「……デザートはいらねえか」

「がふう！」

「こ、コウちゃん!？」

「おい、てめえ……そいつを連れて消えろ」

「は、はいいいい!!！」

そのまま不良たちは退散していきました。

「ふー……おい、坊主。大丈夫か？」

「……あり、がとう」

「礼なんざいらねえよ」

金髪の男性は煙草を吸いながら立ち去ろうとしていましたが、その時ボクのお腹が鳴ってしまいました……

「あん？ 坊主、腹へってんのか？」

「……大丈夫、慣れてるもん」

「……ちっ、ちょっと来い」

金髪の男性はボクを連れて公園のベンチに座らせました。

「坊主、これ食え」

「……………」

渡したのはラップに包まれたオニギリでした。海苔もついていない、白いオニギリ……

「……………いいの？」

「ガキがいちいち気にすんな」

「……………いただきます」

ボクは1口、オニギリを食べました。

「……………」

塩がかかった、何も入ってないただの塩オニギリ。それでも……

「お、い……………しい」

スゴく美味しかった……………今まで食べた事が無いぐらい美味しかった……………

「う、あ……………ああ」

その美味しさに、涙が出ました。家族の葬式でも、苛められても、殴られても……………一切泣かなかったボクが、オニギリを食べただけでボロボロと涙が出ました。

「うめえだろ？」

「……うん、うん！！ 美味しい……ひっく……美味しいよあ……ひっく」

「へっ……泣いてねえで食べる」

「ひっく……うん……はぐっ……おい、じい……はぐっ……ひっく……」

1個のオニギリを1時間かけて食べました。味わうように、ゆつくりと……

「ふー……」

金髪の男性は、曇った空を眺めながら、静かに煙草をふかしてそばにいてくれました。

「……ありがとう、美味しかった」

「だから、礼はいらねえよ」

食べ終えて、泣き止んだボクは、金髪の男性にお礼を言いました。

「これ付けてる」

「……絆創膏？」

渡されたのは絆創膏でした。ボクはそれを左目の下の傷に張り付けました。

「……坊主、お前親は？」

「……去年、みんな死んじやった……今は孤児院で暮らしてる」

「……なんで殴られてたんだ？」

「分かんない……ムカついたからって言ってた。でも、殴られるの慣れてるから」

「……なんで腹が減ってたんだ？」

「……苛められてて、ご飯は全部捨てられてた」

「……そうか」

金髪の男性はボクに色々聞いて、ボクはその全ての問いに答えました。

「なんで、やり返さねえんだ？」

「……僕、弱いから……体も喧嘩も弱いし……だからされるがままでしか方法が無いんだ」

「……悔しくねえのか？」

「……弱い人間は、耐えるか逃げるしかないんだ……」

「逃げる……ねえ」

金髪の男性は、煙草をポケットから取り出した携帯灰皿で消して、立ち上がりました。

「おい、クソガキ……お前、弱い奴がいつつも逃げてると思ってるのか？」

突然尋ねた男性……ボクはその問いに答えました。

「だって、そうでしょ？ 弱い人はいつも虐められて、独りぼっちで、逃げ回ってるでしょ？」

「ふんっ、ちげえよ……人は誰だってなあ、牙を持つてるもんだ……」

「きば？」

「おお、牙だ。弱い奴はその牙の使い方が分からなかったり、使っても勝てないって思ってたんだ……」

「……」

ボクは考えました。じゃあどうすればいいんだ？ボクはどうすれば……こんな地獄から解放されるんだって。

「……なら、どうすればいいの？ どうすれば強くなれるの？」

ボクは答えが出ず、男性に問いました。

「簡単だ、牙を研げばいい。長い年月をかけて、丁寧に鋭く研ぐのさ」

男性は不敵な笑みで答えました。

「……研ぐまでに時間がかかるよ？ その間どうすればいいの？」

「ああ？ そんなの決まってるじゃねえか。逃げればいいんだよ」

新しい煙草を吸いながら答えた男性……でも、ボクはその答えにガツカリしました。

「結局逃げてるじゃん……」

「はあ……だからあ、ただ逃げるんじゃないよ……」

呆れたように頭を横に振っていました。その態度に少しムツとしたボクは、反論しようと思いました。

「何がなんでも生き延びて、泥を嚼りながら逃げて、それでも牙を研いで……」

「……」

でもボクは、反論しませんでした……いや、反論できませんでした。

「最終的には……」

雲の切れ間から、太陽の光が漏れました。

「弱い奴でも……」

太陽の光が男性を照らしました……煙草を口に食わせ、不敵な笑みを浮かべ、ポケットに手を入れながら……

「逃げずに戦えるさ！」

男性はボクに言いました……

「……！」

その瞬間、ボクの中で何かが戻っていく音がしました。

「……僕でも……強く、なれますか？」

「なれる……まあ、その為には勇気と信念と根性が必要なんだがな……」

「おい、クソガキどうする？ 弱いまま逃げるか？ それとも……」

「俺と一緒に、牙を研ぐために逃げるか？」

「！」

ボクは気付きました。ボクは誰かに助けて欲しかった……手を差し伸べて欲しかった……って。

「……つよく、なりたい……」

ボクは、心に決めました。

「あん？ 聞こえねえな」

「……強く、なりたい……！」

ボクは……

「聞こえねえなあ……！」

「」

ボクを助けてくれた、金髪の強いヒーローみたいな……

見ず知らずな他人にご飯をくれる、優しいコックさんのような

……

優しくて強くてかっっっいっ……

「強く、なりたい!!!」

「この男性のように……」

BATTLE 14 (後書き)

と、言う感じですよ。

次回から現在に戻ります。

感動していただければ、嬉しいです。

BATTLE15 (前書き)

今までで一番長いです。

何を伝えたいのかが分からないかもしれません(泣)

BATTLE 15

「……これがボクと師匠の出会いでした」

昔の話を終えた兼一は、下を俯いたまま秋雨に言った。

「……」

黙って話を聞いていた秋雨。静かな道場に時計のボーンという音が響く。

「それからボクは孤児院を出ました。その後はずっと師匠に着いていき、武術と料理を教わりました」

兼一は昔を思いだし、くすりと笑った。

「武術の才能が無いボクは、必死に修行しました。何日も、何カ月も、何年も……辛かったけど、それ以上に楽しかった」

思い出すのは修行の日々……怒られたり、蹴られたり、褒められたりな思いで。そのすべてが宝物のように煌めいていた。

「……師匠が働いていたバラティエで料理の修行をしました。気性が荒いけど気の会う仲間たち、色々助言してくれたじいちゃん……」

移動レストラン『バラティエ』……世界中をトラックと5台のキヤンピングカーで移動し、色々な場所で料理を振る舞うレストラン。従業員はみんな気性が荒く、レストランをクビになった荒くれ者が多かった。だが普通の料理人に比べ、料理に対する愛情が素晴

らしかった従業員たち。

そしてバラティエのオーナー、師匠の師匠……つまり兼一の大師匠は、兼一に色々教え、兼一はじいちゃんと呼んでいる。

「そんなバラティエを師匠はボクの為に辞めて、この場所でボクを育ててくれました」

兼一の師匠は長年勤めていたバラティエを兼一の為に辞めるとオーナーに言っていた。

土下座までしてオーナーに言った師匠……その光景をいまだに兼一は忘れなかった。

「ボクの為に実家を親戚から取り戻し、ボクを養子にして育ててくれました」

奪われていた実家……師匠はその実家を売ろうとしていた親戚に頼み込んで取り返し、兼一を養子にした。

「……嬉しかった……師匠はボクに料理や武術だけでなく、生き方も教えてくれました」

女性は大切にしろ、戦いでは手を使うな、腹が減っている奴には敵でも飯を食わせる……多くの教えを兼一は思い出していた。

「……そんなある日、師匠は突然旅に出ると言いました」

忘れもしない5年前の秋、師匠は突然兼一に旅に出ると告げた。

「理由を聞くと、世界中の女性が俺を待っている！……って言うてましたが、すぐに嘘だと分かりました」

そう告げてから旅に出る師匠……大きいトランクケースを持って兼一のもとから去っていった。

「……それから1人で修行しました。1ヶ月に1度送られてくる手紙には、修行方法が書かれていて、その通りにしてきました」

送られてくる手紙には、バカ弟子へと始まる文面と、修行方法。そして、写真だった。

「ボクは送られてくる修行方法の2倍のメニューをこなしました。早く強くなりたい……その一心で」

ただでさえキツイメニューを2倍で行う兼一。ただひたむきに、愚直に修行をこなしていた。

「才能が無いボクには、人一倍努力が必要でした……だから必死にやりました」

春の日には暖かい木漏れ日を浴びながらの修行。

夏の日には炎天下の中汗を滝のように流しながらの修行。

秋には紅葉を踏みしめながらの修行。

冬には氷点下の中での修行。

来る日も来る日も、毎日修行をした兼一。

「でも、ボクには圧倒的に実践経験が少なかったんです。だから、14歳になってすぐにバイトを始めました」

「……バイトとは？」

黙って聞いてた秋雨は、兼一に質問をした。

「……表向きは喫茶店ですが、裏では護り屋という用心棒みたいな事をしていました」

喫茶マツエ……表向きは普通の喫茶店だが、裏ではその筋では有名な、護り屋をしていた。

喫茶店のマスター、松江は戦いこそ出来ないが、人を見る目だけは達人級だった。

松江の目にかかった兼一は、スカウトされた。

「そこからは喫茶店の仕事をしながら、たまに入ってくる裏の仕事をしていました」

たまにかかってくる電話は、裏の仕事の依頼だった。

仕事の内容は、店に迷惑をかける不良の退治や、要人の護衛、マフィアの殲滅等々、危険なものばかりだった。

「1度死にかけた事もありますし、大怪我をしたこともあります……それでも、ボクは強くなれた」

腹を刺された事もあった、銃撃戦の中での戦いもあった、準達人級の相手とも戦ったこともある……

「そんな毎日を過ごしていた時、師匠から1通の手紙が届きました」

届いた手紙はいつも通りのバカ弟子へと始まる文面、だが修行内容を書いておらず、小さい箱を開けると書いてあった。

「一緒に届いた箱に入っていたのは、このペンダントでした」

兼一は首からロケットペンダントを取りだし、蓋を開いた。そこに入っていたのは、昔撮った家族写真だった。

「師匠はボクの誕生日を覚えていて、プレゼントにこれをくれました」

キラリと光る銀色、蓋の中心に刻まれた十字架の装飾。

「……このペンダントと手紙が最後で、それ以降は手紙が来なくなりました……」

兼一は天井を見上げた。

「……生きていて欲しいと思いました。でも、心のどこかでもう死んでるんじゃないかって……」

目をギュツと瞑り、涙をこらえる兼一。

「……ボクの師匠であり、目標であり、夢だった……そんな大切な人は……」

そこから兼一は、黙ってしまった。秋雨はそんな兼一をジッと見つめる。

「……彼は、戦いで重症を負った……いわば、誰かと戦ったことになる……」

秋雨はボソツと言った。

「で、君はどうしたい？ 彼の敵をとるか？」

兼一に質問をする秋雨。兼一は目を瞑りながら天井を見上げながら考えた。

「ただいま帰りましたわ〜」

一方その頃、美羽は梁山泊に帰ってきた。

「この靴……兼一さんがいらしてるんですわね！」

玄関に置いてあった兼一の靴を見て、嬉しそうに道場にむかう美羽。

「ちょっと待て美羽」

「ほえ？」

道場の廊下に立っていた逆鬼は、美羽を止めた。

「今道場には行くな……」

「な、なんでですか？」

「今兼一は秋雨と話している……邪魔すんな」

逆鬼は道場をチラッと見ながら答える。

「じゃあお話が終わった後に……」

「……いや、もう少し待ってやれ。それまで部屋にいる」

「……？ 終わった後じゃダメですか？」

美羽は首を傾げながら逆鬼に言った。

「……いいか美羽。男には、女にや見せたくねえ顔ってのがあるんだ……兼一の事を思うなら、しばらくしてから会ってやれ」

「はあ？ そうなんですか……分かりましたですわ」

逆鬼の言葉を不思議に思いながら、美羽は自室に行った。

「あっぱ……逆鬼は優しいよ」

「うるせえアパチャイ！」

アパチャイの言葉に頬を赤くしながら逆鬼は障子に背中を預けた。

「ボクは……」

道場から聞こえる兼一の声。アパチャイと逆鬼はこっそり話を聞いていた。

「ボクは……」

話を聞いていたのは2人だけではなく、馬としぐれと長老も聞いていた。

馬と長老は逆鬼たちとは違う障子から、しぐれは天井裏にいた。

「ボクは、敵討ちはしません。師匠はそんな事を望んだりはしないので……」

兼一は師匠の敵討ちはしないと秋雨に言った。

「それじゃあ、君はこれからどうするんだい？」

「……………」

秋雨の質問され、黙る兼一。

「一人で修行します……今までと同じように」

「一人で修行なんてたかが知れているよ……それじゃあ君は「じゃあどうすればいいんですか……」……」

秋雨の言葉を遮るように怒鳴る兼一。兼一は畳をおもいつきり殴り、俯いた。

「師匠がいない今！　ボクは一人でも強くならなくちゃいけない！　それが無謀でも、無茶でも、たかが知れている事でも！　そうしなくちゃいけないじゃないか……！」

今までの感情が溢れるように叫ぶ兼一。

「だから！　師匠がいなくてもボクは戦い続ける……！　そうしないと……師匠のように……なれない……！」

兼一は師匠がいない間、ずっと1人だった。修行の時も、戦いの時も、生活も……ただ、幼い時とは違い、兼一には武術と料理があった。

この2つを極める事、極める事によって師匠に近づける、目標に……夢に近づける、それが今まで兼一を支えてきた。だが、その目標は、もう……。

「……君の夢はなんだい？」

突然質問する秋雨。

「強くなって、師匠のようになる事……です」

「……強くなるだけが、彼になれる事かい？ それが本当に君の夢かね？」

秋雨は少し間を開けた。そして……

「……君の夢は師匠のようになって終わりかい？」

「……！」

秋雨の言った言葉にハッとする兼一。

「……そうだ……ボクは、師匠になって終わりじゃない……」

思い出すのは、初めて会った時の事……

「師匠のように強くなって……」

空腹の兼一にオニギリを渡す師匠。

「師匠のように料理が上手くなって……」

敵に食事を与える師匠……

「ボクは……」

「強くて、料理が上手くて優しい……師匠のようなヒーローになって、誰かを助けたい……！」

思い出すのは助けてくれた時の事……オニギリをくれた事……師匠の強さに憧れた、師匠の料理の腕に憧れた、師匠の優しさに憧れた……

「ボクは師匠のようになって終わりじゃない……師匠には憧れていた。だけど、ボクの目標なだけだった」

師匠に憧れて、自分の目標にした。だがそれは……

「それは目標であって、夢ではない……ボクの夢は、師匠がボクを助けてくれたように、ボクも誰かを助けるヒーローになる事だった」

誰もがボクを見て見ぬふりをした。ボクを苛めた。誰も助けてくれなかった。

そんな地獄から、師匠は助け出してくれた。

眩しかった。まるでヒーローのようだった。

そんな師匠に憧れた。

そんなヒーローに、なりたかった。

「ボクは、誰もが見て見ぬふりをするような……悪をやっつけて、弱い者を助けるヒーローになりたい……その為に、力が欲しいです！」

兼一の叫びが道場に響き渡った。

「……兼ちゃん、ちよつといいかの？」

障子を開けて道場に入ってくる長老。

「兼ちゃんは、内弟子と言うものを知っとるかの？」

「内弟子って……師のもとで住み込みで修行する事ですよね？」

長老の問いに答える兼一。その答えにニカッと笑いながら髭を撫でる長老。

「兼ちゃん梁山泊に弟子入りし、ここに住んでみんかの？」

「…………え？」

長老の言葉に言葉を失う兼一。

「い、いいんですか？」

「構わんよ！ お主が強くなりたいと願うなら……………のう？」

「！」

兼一は1度目を瞑り、覚悟を決めた。

「……………お願いします！！ ボクを強くしてください！！」

覚悟を決めた兼一は、長老に頭を下げてお願いした。

「おおお〜アパチャイ！！ 準備万端よ！！」

「うわっ！！」

いきなり現れたアパチャイは、手にグローブを付け、両方の拳を合わせていた。

「ちょ、ちょっとアパチャイさん！？」

「おいおいアパチャイ、初めて弟子が出来て張り切るのはいいが、君は手加減って言葉を知らないからなあ……………」

アパチャイに片手で担がれた兼一。そんなアパチャイに笑いながら言う秋雨。

「あぱ？テカゲンって何よ？ 日本語難しいよ！」

「ほ、本当に知らねえのかい！？」

手加減って言葉をキツパリと知らないと言うアパチャイにツッコム兼一。

「大丈夫よ兼一、日本語詳しく無いけど、人間のぶっこわし方はアパチャイ、とつても詳しいよ！」

「大丈夫じゃねえ！？ 下手したらボク死ぬよね！？ ねえ死ぬよねええ！？」

ぎゃあああと叫びながら外に連れ出される兼一。アパチャイは機嫌よく歌っていた。

「あいつにまかせて大丈夫か？」

「ほほえましいじゃないか。初めての弟子で嬉しいんだろ」

頭を片手で掻きながら入ってくる逆鬼に答える秋雨。

「のりのりね」

「……………」

面白そうに笑う馬に、天井に逆さでぶら下がりながら兼一を見るしぐね。

「ホツホツ、楽しくなりそうじゃのう」

髭を撫でながら廊下に立ち、空を見上げる長老。

空は快晴、青空に白い雲。太陽が明るく梁山泊を照らし……

「ぎゃあああああ！！」

回転しながら空を飛ぶ兼一がいました。

BATTLE 15 (後書き)

今回スゴイ難産でした…… (汗)

途中から何を書きたいのかわからなくなり、ぐちゃぐちゃかもしれませんが……あまり気にしないでください (苦笑)

明日から学校なので、更新が遅くなります。申し訳ありません。

BATTLE16 (前書き)

待たせたな!! (スネークボイス)

忙しくて中々書けませんでしたが、申し訳ありません。

明日から1ヶ月、実習が始まるため、週1で更新できればいいなあ
と思っています。

もうすぐ総アクセス数30万……ビックリです(汗)

BATTLE 16

「……よし、準備完了！」

大きなリュックに服を入れた兼一。梁山泊に弟子入りした兼一は、家を出る準備をしていた。

「忘れ物は……まあ、近いから忘れた時は戻ってくればいいか」

荷物を玄関に置き、リビングに置かれた写真立てを見つめる兼一。

「……いつてきます」

写真に写っているのは幼い頃の兼一と生きていた頃の家族。

兼一はその写真にいつてきますと言った後、玄関にある荷物を持って外に出た。

いつてきますの返事は無いはずだが、不思議といつてらっしゃいと聞こえた気がした。

「今日からずっとここで修行か……頑張ろう！」

梁山泊の敷地内、兼一はリュックを背負い立っていた。

「あ、兼一さん、いよいよ今日から住み込みですわね」

出迎えたのは極薄のボディスーツを身に纏い、上から白いエプロンを着けた美羽だった。

「みなさんお待ちかねですわよ！」

「あ、はい」

兼一は美羽に連れられ、道場に行った。

「しつれいしまーす」

道場の障子を開ける兼一。そこにいたのは……

「……！！！」

強烈な気迫を放つ梁山泊の達人達。兼一は気迫に驚き、後ろにジャンプした。

「ふむ、いい動きだね」

「まあまあだな」

「あはははは」

兼一の動きに感心する達人達。

「……いきなりなんですか？」

冷や汗をかきながら道場に戻る兼一。

「さて、今日よりお主を梁山泊の正式な弟子とする」

いつもの飄々とした感じから一変し、真剣な表情で言う長老。

「いいかガキ、お前は「あのお」……ん？ 何だ？」

逆鬼の話を遮る兼一。

「逆鬼さんできれば……名前で呼んでくれませんか？」

「おっと、わりいな……よし、兼一！ これでいいか？」

「はい、逆鬼先生！！」

「せ、先生……いや〜」

兼一の言葉に照れる逆鬼。

「さて、さっそく修行を始めたいが……」

「あ、岬越寺さ……先生」

壁に寄りかかりながら顎に手を添えて話す秋雨。

「君がいつもどんな修行をしているかは知らないが、ここではそれ以上に辛いと思っていてくれ」

「は、はあ……」

兼一は秋雨の言葉に苦笑いをした。

「それでは……始めえー!」

秋雨の目が光り、気合いの入った声と共に修行が始まった。

「ぐあっ……きつつい……」

最初の修行……空気椅子。両手に水の入った壺を持ち、足を口で固めて動かないようにし、お尻の下には根性と書かれた線香を置いている。

「はい、後30分」

それをお茶を片手に持ち、くつろぎながら見てる秋雨。

「な、長くない……ですかあ?」

「普通だよお」

ただいま1時間経過……

「うばあああああー!」

「ははは！ おらおらおらおらあ！！」

「やめてえ！！ 顔がすり減るうう！！」

次の修行……腕の筋肉トレーニング。逆立ち状態で背中に取っ手を付け、逆鬼が取っ手を持ちながら走り、兼一は腕の力だけで前に走るトレーニングだ。

ただそのスピードが速く、兼一は必死だった。

「おらおらー！ どんどんスピード上げるぞ！！」

「これ以上は無理いい！！」

「お前は腕を使っただけ蹴る技が多い！！ だから腕力をつけねえとバランスを崩して威力がでねえ！ オレもそう思ってたぜ！！」

「お、オレもお！？……はっ！！」

逆鬼の言葉に違和感を感じた兼一。そして気付いた。

「あ、あんたかあ！？」

逆鬼の言った言葉は「オレも」と言っていた。つまり、最初に言ったのは……

「さあ頑張つてえ」

秋雨だ。木に寄りかかりながら兼一に手を振る秋雨。

「……あの、岬越寺先生？」

「どうしたんだい？」

「恐ろしく嫌な予感がするんですけど、これは一体どういった修行ですか？」

「……………」

足と腕を固定され、上半身しか動かせない状態の兼一は、ロープを縛っている秋雨に質問した。

そして正面にはゴムボールを持ったしぐれがいる。

「君は戦う際には手を使わない。だからガードをしなくて攻撃を避ける練習さ」

「頑張つて、避けて……………ね」

兼一から10メートルほど離れたしぐれは、ゴムボールを片手に持ち、振りかぶった。

「え？……………うわあっ!？」

兼一の顔の横を高速で通りすぎるゴムボール。ギリギリ上体を横に曲げて避けた兼一。

「とりあえず200個あるから全部避けるように。10個当たった
ら最初から」

「き、鬼畜だ……ってうわぁっ！ ひいつ！」

連続で来るボールを右に左に避ける。

「ファイ……ト」

「ひいつうわっ……ぶはぁっ……！」

「午前の部終了。昼食食べたらまた楽しい修行の始まりだよ」

「……殺され……る……」

地面に横たわり、真っ白な灰になった兼一は、口から魂を出しながら気絶した。

「午後の修行を始めるね。午後は技の練習をするね」

「あぱぱぱ」

「……はい」

午後の部、道場で技の修行。今日は馬による中国拳法の技と、アパチャイによるムエタイの技を教えてもらう事になった。

「まず最初においちゃんからね。兼ちゃんは足技主体だから……そうね、前掃腿からね」

そういつて馬は、突然しゃがんで手をつき、左足を軸に回転しながら右足で兼一の両足を刈るように蹴った。

「ぐえっ！」

いきなりの事で受け身が取れず、後ろへ頭から倒れる兼一。

「これが前掃腿ね。これは相手の足を刈る蹴り技ね」

馬は兼一に笑いながら説明した。

「あぱっ！ 次はアパチャイの番だよ！」

軽く手を上げるアパチャイ。

「ムエタイの基本、カウ・ロイよ！」

カウ・ロイとは、飛び膝蹴りの事だ。アパチャイは両腕を頭の横に構え、空中で膝を曲げて蹴った。

「うはっ!」

風圧で兼一の髪の毛が上に逆立つ。風圧で蹴りの威力が凄いと感
じる。

「とりあえず、これを1000回ずつやるね」

「うえっ!?! せ、1000回!?!」

馬がさらつと言った回数に驚く兼一。

「まずはカウ・ロイからよ!」

アパチャイは気合い十分な顔でミットを構える。

「……やるしかないか」

諦めた顔で構える兼一。さっきのアパチャイのように両腕を構え

……

「シッ!」

ミットに右膝を打ち込む。乾いた音が道場に響き渡る。

「あばっ! 兼一、相手が近づいたら首を取ってカウ・ロイよ!」

「はい!」

言われた通りにミットを両手で掴み、膝を打ち込む。

「はい!! 次は避けるよおお!!」

「はい!!……つて、ええ!?!」

「あ、こら! アパチャイ今回は打たせるだけ……!」

馬の声は届かず……

「イゝヤバダバドゥッ!!」

「にゅっ!?!」

叫び声と共に兼一の顔に左のミットを叩き込んだ。

BATTLE 16 (後書き)

今回は修行だけです。

独自解釈がある場面がありましたが、大丈夫でしたかね？ (汗)

BATTLE17 (前書き)

連続投稿！

1時間かからずに書けました！

今回はちょっとヒロイ………？

BATTLE 17

「もう……だめ……」

全部の修行が終わり、梁山泊の『離れ』の自室に戻った兼一。時間は7時、外は暗くなり、三日月が辺りを照らしていた。

「うばああ……」

ボロボロの部屋の畳に寝そべり、汚い天井を見つめる兼一。左頬が腫れたので湿布を貼り、身体中が痣だらけになっていた。

「キツイよお……師匠、貴方の修行が天国だと思ったのはこれが初めてです……」

今は亡き師匠に目尻にキラリと光る涙を溜めながら言う兼一。サムズアップされた師匠が親指を立てて笑っている光景が目に残った。

「でも、この修行を乗り越えれば……ボクは強くなれる」

ガバツと起き上がる兼一。その目には闘志がみなぎっている。

「負けてたまるかーっ!!」

気合いをいれた兼一は叫んだ。

その叫び声を部屋の前で聞く逆鬼と秋雨、そして馬。3人は兼一が逃げないように見張っていた。

「やれやれ少し元気づけて……やろつかね！」

秋雨と暮を打っていた馬は、意味ありげな笑みを浮かべながら言った。

「何です、こんな時間に？ まだ修行するんですか？」

夜の10時、白い胴着を着て、げっそりとした兼一と後ろで手を組む馬は外にいた。

「ある意味、命懸けの修行ね！」

ニコニコと笑いながら言う馬。兼一はある事を思い出した。

「（そういえば、中国拳法では内弟子にしか教えない絶招というのがあったな……誰にも見られない様伝えられるとか……）」

絶招、これは奥の手の総称の事だ。

「ついてくるね」

ついてくるよう言った馬は、裏庭の方へ歩き出した。

「梁山泊の裏庭っておそろしく広いですね……都心のと真ん中によ

くもまあ……」

裏庭の広さに呆れる兼一。

「かがむね」

「へっ？」

草場にかがむ馬に習い、一緒にかがむ兼一。

「あれ？ 湯気が出てる……」

遠くの方で白い湯気が立っていた。

「あれは……温泉ね！」

「お、温泉!？」

「しーっ、静かにね!！」

白い湯気の正体は温泉らしい。馬は驚いて声をあげた兼一の口を手で押さえた。

「ずっと前にアパチャイの奴がいきなりあそこを掘始めて、3日ほどで堀あてたね」

「おいおい……」

馬の説明に思わずつつこむ兼一。

「で、それがどうして命懸けの修行……はっ!」

「フッフ、ものわかりがいいね」

ある事に気付いた兼一は、顔を赤らめた。その反応にいやらしい笑みの馬。

思い浮かんだのは温泉に入っている裸の美羽としぐれの姿。

ようは、覗きに行こうという事だ。

「さ、早く行きましょう」

キリッとした顔をし、ほふく前進で先に行く兼一。

「もう兼ちゃんたら……む!! 動くな!!」

「へ?」

突然の馬の制止に止まる兼一。

馬は木の枝を持って前に探るように振る。すると……

「ひっ!」

枝にむかって竹の槍が突き刺さった。どうやら罫のようで、探った先には紐が張られていた。

「しくねどんの仕掛けた罫ね。温泉に近づくほど凶悪になるね!」

「……まさに命懸けの修行ツスね、馬先生……いや、師匠!」(エロの)

場にそぐわないシリアスな顔な兼一と馬。

そして、2人のミッションが始まった。

「師匠！ 危ない！！」

「！」

馬にむかつて飛んでくるロープがついた竹の槍。全方向に丸く尖った竹が、馬を突き刺そうとする。

「ちよわっ！！！」

それをほふく前進の状態から上半身を曲げて躲した。

「！！！」

「兼ちゃん！！」

突然姿を消す兼一。落とし穴に嵌まり、落下したようだ。

「あ、ぶ、ねええ……！！！」

穴の中で必死に足と手を使いなんとか落下を防いだ兼一。
下にはまた竹の槍が30本ほど待ち受けていた。

「師匠……これは使えますか？」

「これはいいね！」

なぜか置いてあった2枚の段ボール。2人はそれを被り、しゃがみながら歩いた。

「なぜだろう……どこか懐かしいような……被らなければいけない使命感が……」

「兼ちゃん、早く進むね」

「しっかりするね！ もう少しね！」

ピシャッと兼一の頬を叩き、気合いを入れさせる馬。

2人の間に、師弟を越えた友情のようなものが芽生えた事は、言うまでもない。

「はあっはあっ」

決死の思いで罫を掻い潜り、目的地に着いた2人。

「！」

「むっ！」

草場の奥からジャブっと水の音がした。

（（いるー！！））

誰かが温泉に入っているようだ。

「あ、師匠ずる〜い」

「弟子は師の後と4000年前から決まってるね！」

ニヤニヤといやらしい笑みで覗こうとする2人。馬は兼一を蹴りながら先に覗いた。その後、続く兼一。

そして、覗き見た桃源郷の先には……！！

「何じゃ2人共！ 入るならさっさと入らんかい！！」

真っ裸の老人がいました。

「……………」

あまりの光景に口から魂が連続で出る兼一。

「……………！」

逃げようとしたが服を掴まれる馬。

「あれ？ 長老……………いつもは最初に風呂に入るのにね」

「ははは剣星！ わしがお主の、行動ばたあんを読めぬとも思っ
たか！？」

温泉にいたのは長老だった。長老は2人の襟首を掴んで持ち上げ、
カラカラと笑う。

「まあ2人共ゆっくりと、つかってゆくがよい！！」

そして2人を思いきり温泉に突っ込んだ。水飛沫を上げて温泉に

入る2人。

(師匠……無念です)

(なんの、チャンスはまたいつかくるね)

アイコンタクトで話す2人。

エロ師弟の挑戦はまだまだ続く!!

「まーなんだ、一度や二度の失敗であきらめてはいかんという事じやな。ケンカも覗きも。」

頭にタオルを乗せて言う長老。

「はぁ……ガンバります……どっちを？」

裸で温泉につかる兼一。

「ふ」

タオルで顔を拭きながら温泉につかる馬。

「……兼ちゃん、その背中のは……」

「ああ、はい。これが事故の時の傷です」

馬が兼一の背中にある傷を見つけ、兼一は背中を長老と馬に見せる。

右から左にかけて斜めに走る傷跡。深く抉れ、事故の酷さを物語っている。

「ま、男だったら誰しも傷がつくもんじゃ。身体にも心にも……のう」

背中を見た後、論するようにつづる人生の先輩の長老。

「ま、そこまで気にしてませんけどね」

苦笑混じりに言う兼一。

「……時に兼ちゃん。今度の覗きはいつにするね？」

「明日にしましょう」

馬の提案に即答する兼一。

「ほっほっ、まあ頑張りなさい」

笑いながら言う長老。

楽しげに話す3人を、綺麗な三日月が照らしていた。

BATTLE17 (後書き)

エロくなかったぜ！

前書きで期待してた人、残念でした(笑)

事故の時の傷を出したくて書きました。

段ボール？ははは、なんのことやら……

INTERVAL 2 (前書き)

短編小説です。

この先の物語には必要な人達の登場です。

INTERVAL 2

とある建物のとある部屋。そこに1人の少女と何人かの男達がいた。

「なにい？ 筑波が？」

茶髪のショートヘア、頭に帽子を被り、左足のズボンが無く、鍛えあげられたしなやかな足を出した格好の少女。

その少女は隣にいる金髪の男の報告に笑った。

「アハハハハ、そうかい！ 筑波の奴、白浜とかいう奴にのされたのかい！？」

少女は適度に汗をかけた体でステップを踏み、回転しながらジャンプした。

周りの男から1つのコンクリートの塊が投げられる。

「シッ！！」

後ろ回し回転蹴り、勢いよく放たれた蹴りは、コンクリートの塊を蹴り碎いた。

「いるじゃないか……イキのいいのが！！」

華麗に着地する少女。その動きはテコンドーをやっている人間で、碎かれた塊から蹴りの威力が分かる。

「ふうー……おい、お前ら！！」

その少女が呼ぶと、後ろから3人の男が現れた。

1人は褐色な肌に金髪、長身で左手をズボンのポケットに入れて
いる男。

1人は褐色の男よりも背が高く、がたいのいいグラサンの男。

1人は小柄で、頭にバンダナを細くして巻き、ピアスを付けた男。

「お前ら技の三人衆に命令だ。白浜という奴をここに連れてこい」

「うす……」

グラサンの男は技の三人衆、投げの宇喜田。

「分かりました」

褐色の男は技の三人衆、突きの武田。

「はい」

小柄の男は技の三人衆、ケリの古賀。

「どんな手段を使ってでも連れてくるんだ」

そう言って少女はまたステップを踏んだ。

「キサラ様、もう一つ情報が……白浜は蹴り技の使い手らしいです」

「なにい？」

飛んできたコンクリートの塊を蹴り砕く少女……名はキサラと言

うらしい。

「そうかいそうかい、蹴り技の使い手ねえ……わたしの他にも蹴り技を使う奴がいたとはねえ」

「あ、あの、キサラちゃん？ ボクも蹴り技使っただけど？」

「楽しみだねえ……」

「あ、あの？ キサラちゃん？」

白浜兼一の波乱万丈な学校生活はこれからどうなっていくのか………続く！

「キサラちゃああん!？」

「うっさい!?!」

「へびっ!?! し、じやう」

INTERVAL 2 (後書き)

古賀は残念な子。(笑)

総アクセス数が30万越えたWWW
この作品を読んでくださっている全ての皆様に感謝を……

BATTLE18 (前書き)

総アクセス数が40万近くになってきたよ……
読んでいただいております。

初めて投稿してから3週間が経ちますね……早いですねえ。

BATTLE 18

春が終わり衣替えの時期、半袖の白いワイシャツを着た兼一は、学校内を歩いていた。

「ひっ！」

「うわっ！」

「こわーい……」

兼一の周りにいる生徒達は、兼一が通りすぎるとそそくさと離れたり、ひそひそ話をしていた。

「……はて？」

周りの反応に疑問に思い、ベンチの前で考える兼一。

「ボク、何かしたっけ？」

周りの反応は兼一を怖がっているようだった。

「よっ、どうなさったんですの？ ホッ。」

「わっ！」

兼一の後ろにある木の枝に飛び乗り、1回転してから着地する美羽。

「美羽さん……また近道ですか？ いや、それがですね……」

「号外〜号外〜」

「ほえっ？」

遠くから誰かの声がし、2人は声がした方向を見た。

「あの白浜兼一が、なんと空手部で1番の悪！ 筑波を倒しちゃったよーっ！！ さあ大変な事になった！ あ、持ってつてくください」

その先には右肩に白浜白星！ 相手は筑波……と、書かれたたすきをかけ、左肩には大量の紙の束が入った鞆をかけた男。

「に、新島あ！？」

宇宙人のような男、新島だ。配っている紙には兼一が筑波を倒したという内容が書かれていた。

「白浜は実はかなり凶ぼっ「ちえすとおお！」「ぶっ！」

新島を止めるように走り出した兼一は、新島の頬に飛び蹴りをした。

「……………」

「う、うわぁ白浜だ！！ 本当に凶暴だったのか！？」

「きゃー！ー！」

兼一の行動に逃げ惑う生徒達。パタツと気絶する新島。

「どういづつもりだああ新島ああ!?!」

気絶している新島の首もとを掴み、ガクガクと前後に揺らす兼一。

「えい!?!」

「ハッ!」

新島の両肩を押さえた美羽は手に力を込めた。すると新島は気を取り戻した。

「やあ、これはこれは……ボクの親友の兼一君!」

「誰が親友だ! これは何のまねだ!?! 説明してもらおうか!?!」

ゆらりとした動きにへへへと笑いながら手をする新島。そんな新島に怒鳴る兼一。

「オレ、新聞部だし……親友の出世と聞いちゃ、黙っていられないじゃん……照れんなよ」

「照れてない!?!」

兼一はポンと肩を叩く新島を怒鳴り付ける。

「ん!? 隠れる兼一!?!」

「うわっ!」

肩を掴んだまま後ろに兼一を隠す新島。すると、3人の男が歩いてきた。

「ふん！ 筑波のまぬけめ……ラグナレクのいい面汚しだ……」

1人の男が、新島が配っていた紙を見た後ハラリと紙から手を離し……

「……」

高速で放たれた右手の拳が、乾いた音をたてて破れた。

突きの武田一基。

「筑波をしめろ！ 2度と学校には顔を出さすな」

「うす」

白いワイシャツにグラスンの男。

投げの宇喜田。

「あいよー！」

小柄で、頭にバンダナを細くして巻いている男。

ケリの古賀。

技の3人衆はバラバラに歩き、その場から離れた。

「……もういいぞ」

「今の誰？」

3人がいなくなった後、兼一は新島の影から顔を出した。

「ありやラグナレクの連中だ」

「ラグナレク……どっかで聞いたような」

ラグナレクというグループに聞き覚えがある兼一。

「この辺りを牛耳る強力な不良グループだ！ さあ大変だぞ兼一、お前は目立ちすぎたからな……いずれ待ち伏せもあるかもしれないぜ」

にやにやと不気味な笑みを浮かべながら脅す新島。

「お友達になりたいだけかもしれないわよ？」

「いや、ねえよ」

「はう！」

美羽の天然発言に新島と兼一は同時につっこんだ。

（それにしても、面倒な事になってきたな……）

「と、いう訳で何か対処法はありませんか？」

場所は変わって梁山泊の道場。カコーンと高い音をたてるしおどしが鳴り響いていた。

道場には梁山泊の達人が全員集合していた。兼一は正座しながら長老に相談する。

「そうか、それは大変な事になったのう……では一つ、わしが良い作戦を教えよう！」

髭を撫でながら言う長老。それを息を飲みながら真剣に聞く兼一。

「作戦……ですか……」

「名付けて！」

戦って戦って、戦い抜いたら最後に立っていたのはボクだった！

「作戦じゃ！」

あまりにもぶっ飛んだ作戦にこける兼一。

「なんだそりゃー!?!」

「類似品に、逃げて逃げて逃げ抜いたのに最後は結局捕まった作戦ってというのが……」

「もういいわ!」

ケロツと言う長老に呆れる兼一。頭が痛くなり、ため息をついた。

「へへへ……戦いつてのは始めちまったら、途中じゃやめらんねーってことよ!」

「そゆことね!」

話を聞いていた逆鬼と馬は、便乗するように言った。

「しかし、敵が組織だつてきた以上、大急ぎで多対一の戦法を教えねば……」

「敵は武器も……使ってくる……」

今後の修行方針を決める秋雨、ボソリと言うしぐれ。

「はあ……他人事だと思って……」

「まあ、なんじゃ。お前は戦う道を自ら選んだ者じゃろっ?」

「……はい」

「だったら……覚悟決めちまえよ!」

兼一の背中を押すようにニッと笑いながら言う長老。

「……はい!」

兼一はその言葉に返事をした。

「でも……ずっと戦いばかりだと大変ですよ……休む暇があるのかなあ?」

兼一は覚悟を決めたものの、これからの戦いの日々思わずため息をついた。

「ふむ、ここで良い話を聞かせてやるぞ」

兼一の言葉を聞き、長老はとある話を始めた。

「ある武術家のお話じゃ……その者は若気の至りから、ついつっか
りと……」

500人の達人を半殺しにしてしまったのう……!!

1度戦つちまうと、やりたくなくても次々と喧嘩を売られちま

うもんじゃなよ……

だから仕方なく道場破りに明け暮れた……だが、ある日気がつくとその者は……！

「じじいになつとつたんじゃよ」

「だああああ!?!」

長老の話のオチにずっこける兼一。

「グツハツハツハツ!!」

「こりゃ一本とられたね!」

「いつもながら奥が深い……」

「アパパパ?」

「……」

ある者は笑ったり、ある者は感心したりと色々な反応を見せる達人達。

「結局一生戦えっのかー!!!」

「まあ、これはお話じゃからの、実際にはほとんどの者が途中で死ぬ……」

「おじい様！ もう回さう行ってえ!!」

長老を止める美羽の叫びが梁山泊に響いた。

BATTLE 18 (後書き)

早く出したいキャラがいっぱいすぎて困る……

とりあえず、キサラと谷本の出るシーンはもう頭の中で決まっています。

原作とは違う展開にしていきたいと思っています。

最後に……ギャグのセンスが欲しい……切実に……

誰かネタ下さい！(笑)

BATTLE19 (前書き)

総アクセス数40万突破!

総合評価2000pt突破!

感謝感激でございます!これからも頑張りますので、応援して頂けると幸いです。

BATTLE 19

ここは梁山泊。武術を極めた者の集う場所……
そんな梁山泊に1人の少年が……

「ぐわああああ！ もうだめえええ！」

死にかけていた……

「あと40分〜」

死にかけている少年の名は白浜兼一。

兼一はハムスターが使う回し車を人用サイズの大きさにした物の中に入り、両手両足を使ってガラガラと回していた。

「死ぬうううう！」

「死ぬと言えるならまだまだ大丈夫だよ」

ただその回転スピードはまさに高速。

少しでも気を抜けば転んで回し車の回転に巻き込まれるだろう。

「あ、あと何分ー！？」

「あと45分〜」

「増えてるわああー！！」

「……………」

「はい、お疲れ様。次は技の練習だよ」

回し車の修行が終わり、力尽きている兼一に容赦ない言葉をかける男。

梁山泊の達人の1人、岬越寺秋雨。

「次はオレの時間だ。今回教えるのは上段蹴りの基本だ」

そう言って現れた男。空手の達人、逆鬼至緒。

「空手の蹴りはな、まず蹴り脚の膝を抱え込む」

逆鬼は右足をゆっくりと上げ、膝を抱え込むように曲げた。

「これは膝が開いていると軌道が読みやすいからだ。こうして膝を曲げれば、蹴りの可動範囲が広がり、当たる確率が上がる」

ビュンと空気を切る音をたてながら上段蹴りを放った。

「これをマスターすれば上段、中段、下段の蹴りが簡単に出来るよ
うになる」

そのまま中段、下段の蹴りを放つ逆鬼。蹴るたびに空気を切る音

をたてる。

「あとな、ムエタイの蹴りと空手の蹴りは少し違う。アパチャイ！」

「あば！」

逆鬼に呼ばれた男。ムエタイの達人、アパチャイ・ホパチャイ。アパチャイは右のハイキックをサンドバッグに打ち込んだ。蹴りの威力で縦にぶっ飛ぶサンドバッグ。

「ムエタイのハイキックは、まっすぐに最短距離で蹴ってる。だから、蹴りの打ち合いならムエタイの方が速い」

逆鬼は両手を組み、兼一の方を見る。

「だからお前は、場面に応じて空手の蹴りとムエタイの蹴りを使い分ける……って、起きろ！」

「げふっ！」

ずっと力尽きていた兼一は、逆鬼の説明を一切聞いていなかった。それに気づいた逆鬼は、拳骨で兼一を起こした。

「これで技の修行は終わりだね。そろそろ夕食だから、着替えてくるように」

「……………」

時間は夜の7時、1日の修行を終えた兼一は、ピクピクと口から魂を出しながら畳の上に寝そべっていた。

「し、死ぬ……………」

「そういえば兼ちゃん、最近夜のバイトの呼び出しが無いね」

死にかけている兼一に話しかける男。中国拳法の達人、馬剣星。

「夜のバイト……………ああ、護り屋ですか？ あれならもう辞めました。流石に修行の後には無理そうだったので……………」

護り屋……………これは兼一が昔からやっていた用心棒のような仕事だ。喫茶店の仕事と一緒にしていたが、兼一はもう辞めたようだ。

「ほっ、いつ辞めたね？」

「昨日のバイトの時に……………意外とすんなり辞めさせてくれました」

「あん？ 喫茶店の方もか？」

話に入ってくる逆鬼。手にはビールの瓶を持っていた。

「いえ、喫茶店の方は辞めないで欲しいと言われたので……………」

立ち上がり、苦笑しながら言う兼一。

「まあ、確かに用心棒やりながら修行はキツイわな」

「ならもつと修行に力を入れてよさそうね!」

「しまった! や、藪蛇だ!??」

護り屋のバイトを辞めたと知り、今後の修行を厳しくされる兼一はこれからどうなってしまうことやら……

「ふああ……眠い」

次の日の朝、今日は水曜日。

天気は快晴の暑い夏日だ。

「ふふ……まだ修行に慣れませんのですの?」

一緒に登校しているのは梁山泊に住む長老の孫、風林寺美羽だ。美羽はクスクスと笑いながら兼一の隣を歩いていた。

「……あれを慣れる日が来るのでしょうか？」

「あははは……」

どんよりとして答える兼一に先程の笑みとは裏腹な苦笑いを浮かべる美羽。

「あ、そうだ美羽さん！ ボク今日はバイトあるんで先に帰りますね」

「分かりましたわ！ 頑張ってくださいね」

美羽はニコリと笑い、兼一を応援した。

「あ！ 白浜君、おはよう！」

教室に入り、席に座った兼一に挨拶をする少女。

「ああ、泉さん。おはよう」

少女の名は泉優香。兼一のクラスメイトだ。

「あ、あのさ白浜君！ 少し聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

「いいけど……何かな？」

「あ、あのね！ その……」

もじもじとしながら顔を赤らめている泉。

「こ、今度の休みに……映画「席に座れ」！……」

泉の話を遮るように入ってくる担任の安永。キラリと光る頭に前列の生徒が眩しそうに目を瞑った。

「ん？ なんだ泉。早く座らんか」

「……………はい」

恨めしそうに見る泉に注意する安永。注意された泉はとぼとぼと自分の席に戻っていった。

「一体なんだつたんだろう？」

兼一は途中だった話に疑問に思っていたが、朝のホームルームが始まり、アクビをしながら参加した。

「お、おい！ 白浜！」

「ん？ どうしたの？ 姫野さん」

ホームルームが終わり、次の授業の準備をしていた兼一に話しかける少女。名を姫野。

「あ、あのさ！ 白浜はいつも昼御飯どうしてるんだ？」

「自分で作ってるよ」

「そ、そうなんだ！ な、ならさ！ わ、私がつってあげようか？」

「……………え？」

「い、いや、べ、別にいらないうらないんだけどさ！ ただ自分で作ると料理が余るからさ！ 捨てるのももったいないし、かと言って自分で食べるには多すぎるからさ！」

「は、はあ……………」

喋り出した姫野の話は止まらない。それに少し圧倒される兼一。

「余った料理をお弁当箱にいれたら1つ分になるからさ、だから誰かにあげようかなと思ってたんだけど、そこで白浜にあげようと思っただけさ！ いや、別に白浜に作るうとした訳じゃないよ！ ただの気まぐれみたいなもんで、深い意味は無いんだ！ だから……………」

「……………」

頬を赤くし、そっぽを向いて話す姫野。だんだん話が逸れていき、もはや独り言のようになっていた。

どう反応していいか分からず、困る兼一。

「おい、白浜。次は体育だから早く行こうぜ」

そこにクラスメイトの男子からの助け船。

「あ、うん分かった！ えっと、姫野さん？」

「べ、別に好きと言う訳じゃないんだ！ ただ少し気になるっていうか、他の男子とはちよっと……いや、かなり違うから……それに顔も悪くないし、強いし、助けてくれたし……だからちよっといいなあ……で、でも勘違いしないでよね！ それとこれとは別なんだから……そもそも……」

「えっと……さ、先に行くね？」

ボソボソと独り言を言い、自分の世界に入っている姫野。途中から何を言っているのか聞こえなくなっていた。

そんな姫野に一言かけた兼一は、体操着を持って教室から出た。

「そ、そんな訳で！ 明日から白浜に弁当を作っ……ってあれ？」

「……ひ、姫野ちゃん。もう白浜君行っちゃったよ」

「……え？」

自分の世界から帰ってきた姫野が兼一に話しかけるが、もう教室には姫野と泉しかいなかった。

BATTLE 19 (後書き)

とりあえず出番が少ない2人を出したかった回です。

姫野はツンデレ的な感じにします。異論は認めない。

空手、ムエタイの蹴りについては昔読んだ漫画と調べた資料を参考にしています。

作者は武道は剣道とほんの少しの柔道をしていたぐらいですので、合っているかは分かりません。

なのでここは異論を認めます。

BATTLE20 (前書き)

20話です！ようやくここまで来た……

もうすぐ投稿してから1ヶ月経ちます。早いもんですねえ……

BATTLE 20

「はぁ……」

学校の帰り道、バイトにむかう途中だった兼一は、今の現状にため息をついた。

「……なんで」

思わず空を見上げる兼一。夕方の空はオレンジ色に染まり、カラスが数羽飛んでいた。

「……どうして」

現実逃避を止め、辺りを見渡した。

ここはとあるバイト先の近道、何もない空き地だ。

そこに兼一と……

「よそ見なんて余裕だね！」

「てめえ！ シカトしてんじゃねえぞ！」

「古賀さん！ こいつ、ぶっ殺しましょう！」

兼一を取り囲む9人の男達。

手には鉄パイプや木刀等武器を持っている。

「こいつなるの……」

目頭を押さえてため息をまた1つ。

1時間前。

「やっと終わったあああ………」

最後の授業が終わり、放課後のチャイムが鳴る。

授業が終わった生徒は、帰宅の準備をしたり、部活に行こうとしたりとガヤガヤと騒がしくしていた。

「さて……バイトに行きますか」

シヨルダーバッグを肩にかけ、美羽の席に行く兼一。

「あ、美羽さん!」

「兼一さん! もう行きますの?」

「はい! 美羽さんは部活ですか?」

「そうですねよ」

美羽に話しかける兼一。美羽は鞆に筆箱を入れていた。

「頑張ってください」

「兼一さんも！」

そしてお互いに笑いあった。

「やっぱりあの2人って……」

「うう……勝てる気しないよお……」

そんな2人を遠目からひそひそ話をしながら見ている姫野と泉がいた……

「ああ……少しでも修行から逃れられる……まあ、帰ったら基礎トレーニングが待ってるけど……」

学校を出て、バイト先に向かう兼一。背中に暗い影を背負いながらとぼとぼと歩いていった。

「後30分くらいか……近道していいっつ」

腕時計を見て時間を確認すると、バイトが始まるまで後30分だった。

急がないとマズイと思った兼一は裏路地に入り、狭い道を歩いて空き地に出た。

「……あ」

そこに待ち受けていたのは……

「ボクって本当に運がいいんだな。こんな所でばったり会えるなんてね！」

小柄な身長、頭にバンダナを細くして巻き、右耳にピアスを付けた男がいた。

「ボク、古賀太一！ ちょーっと付き合ってくれかな白浜兼一君」

男の名は古賀太一。ラグナレクの技の3人衆の1人だ。

「武田さんが連れてくれるようになってくるさくて……」

その言葉をきっかけにどこからか現れた男達は兼一を取り囲んだ。

「……はあ」

そして話の冒頭に戻る……

「4、5、6……9人か。そのうち武器持ちが3人、素手が6人……」

周りを見渡して人数の確認をする。

武器持ちは3人、木刀と鉄パイプとチェーン。
素手は6人、内メリケンを付けているのが1人、古賀太一も素手
だ。

「もしかして怖じ氣ついたの？」

古賀が言った言葉に周りの男達が笑う。

「はあ……時間無いつてのに……」

腕時計を見れば残りは25分。ここからバイト先まで10分だから、実質15分しかない。

「よし、囲みをせばめろ！ 武田さんには、ズダボロになった君を届けるよ」

「へへっ……」

「ぶっ殺してやるぜ……」

笑いながら指示を出す古賀の言う通りにじりじりと兼一に近づく男達。

「……そういえば、さつき君、運がいいって言ってたよね？」

「……？ 確かに言ったけど？」

突然質問する兼一に疑問に思いながらも答える古賀。

その答えにニヤリと不敵に笑いながらポケットに手を入れ、手袋を手にする兼一。

「どっちかと言つと……」

両手に手袋をはめ、右の爪先で地面を軽くトントンと蹴った。そして……

「運が悪いと思うよ?」

不敵な笑みで挑発する兼一にキレた男達が、一斉に殴りかかってきた。

「てめえ! なめてんじゃねえ!」

素手の男が右の拳を兼一に振りかざすが……

「遅いよ……シッ!」

「ぶべえっ!」

上体を後ろに反らして躲し、右の爪先で顎を蹴り抜いた。

「1人目……シッ!」

「1人目……!」

上にあげた右足を戻しながら後ろに蹴り抜いた。

兼一の後ろ蹴りは、後ろから鉄パイプで殴ろうとしていた男の腹にめり込み、男は勢いよく吹っ飛んでいった。

「2人目……おっと」

「ちっ！」

正面からチェーンを横に振るった男の攻撃を頭を下げて躲す。

チェーンの男は舌打ちをし、2回、3回とチェーンを振り回した。

「おっと……ほっ……よいしょ」

「こ、この……ちょこまかと……!!」

軽く躲す兼一。悉く躲される攻撃に苛立ってきた男は、思い切りチェーンを振りかぶった。

「おらあああ！ あ、あれ？ 消え……」

「足元がお留守だ！」

「う、うあっ!？」

横に振るったチェーンは空を切り、兼一を見失う男。

兼一はチェーンをしゃがみながら躲し、男の足を刈るように蹴った。

前掃腿……中国拳法の技だ。

足を刈られた男はバランスを崩し、後ろに倒れそうになった。

「ふっ……エポール肩肉シュート！」

「があっ！……かはっ」

そこを兼一は、すぐに立ち上がって右足を高く上げ、踵落としを男の肩に降り下ろし、背中から地面に叩きつけた。

「3人目！」

「この野郎！ 死ねえ！！」

「スライス切肉シュート！」

木刀を振るう男に左足を振るう兼一。兼一の左足は木刀を捉え、空高く回転しながら吹っ飛ぶ木刀。

「あ、あれ？……ぶへっ！？」

呆けている男に容赦なく蹴る兼一。

「4人目！ ふっ！」

兼一は逆立ちになり、手を交差した。

「うらあっ！」

「がっ！」

「ぶっ！」

「ぶはっ！」

「ぐえっ！」

手を支点に足を開脚し、回転しながら連続で蹴る兼一。足は男達の顔や腹に当たり、蹴られた男達は気絶した。

「これで……8人。後は君だけだね」

立ち上がった兼一は、1人残った古賀を見る。

「あはは……やっぱり君、強いなあ……でも、ボクの方が強いよ！」

「御託はいいから早く来なっつて」

「い、このお……！」

兼一の挑発に乗った古賀は、走りながら兼一に飛び蹴りをした。

「ボクはケリの古賀太一！！聞いた事な……ぶへえ！？」

言葉の途中で蹴られる古賀。飛び蹴りの最中に兼一の右足が左頬を捉え、きりもみしながら地面に叩きつけられた。

「だから、御託はいいって言ったでしょ？」

フーッと息を吐き、ポケットから飴を取り出して口に食わえ、手

袋をとった。

「やばい……早くしないと遅れる！」

腕時計を見るともう10分しかない。

焦った兼一は、走ってバイト先に向かった。

……余談だが、この後古賀はキサラに右頬を蹴られていた。

BATTLE20 (後書き)

古賀は残念な子。異論は認めない。

兼一無双回です。そこら辺の不良には楽勝で勝ちます。

なんかチートっぽくなっていますが、今だけです。

今後負けたり、ボロボロになったりと戦いは激化していきます。

BATTLE 21 (前書き)

遅くなりました……申し訳ありません。

実習もやっと終わり、少しずつですが時間が空きました。
これからまた更新再開しようと思います！

応援よろしくお願い致します……

BATTLE 21

「おせえ！！」

「へぶっ！」

ここは梁山泊の道場。そこで兼一と逆鬼は組手をしていた。

「蹴りのタイミングが遅い！ もっと確実に蹴れ！」

「は、はい！！」

兼一の蹴りは逆鬼に当たることなく空を切り、逆鬼の手加減した突きが入る。

「ちっ……ちっともうまくならねーな！」

舌打ちをし、頭をガシガシと掻く逆鬼。

「サンドバッグ蹴り1000回やってろ！」

「……は、はい……」

ボロボロな兼一は、逆鬼の指示通りサンドバッグを蹴りにいった。

「ぐっ……はっ……」

「後30」

次の修行、基礎トレーニング。外に出て2本の杭に掴まり、逆立ちをしながら腕立て伏せをする兼一。

汗が滴り、地面を濡らす。回数は200回を越え、腕が悲鳴をあげる。

「もっと腕を下げて！ 足を伸ばす！」

「は……いつ……！ うわっ!？」

秋雨の指示に従うが、バランスを崩し背中から倒れる兼一。

「224回……中々230回越えないねえ……まあ、ゆっくり頑張りましたえ」

「くっ……ぜんぜん進歩してない……な」

ぜえぜえと息を荒げ、地面に寝ながら言う兼一。そんな兼一に近づく1人の男。

「そんな事はないと、アパチャイは思うよ！」

現れたのはアパチャイ。ニコニコと笑いながら来たアパチャイは、兼一を慰める……が。

「でたあああああああああ！……！」

兼一はトラウマが再発し、恐怖で叫んだ。

「あああああああああ！！！！」

その恐怖に反応し、同じ様に叫ぶアパチャイ。タンクトップは筋肉により裂け、上半身裸になった。

「来るなあああ！！」

「あばばばばああ！！」

どこからか現れた石の地蔵をアパチャイに投げる兼一。投げ込まれる地蔵を蹴り、肘、突きで壊すアパチャイ。

「な、なにねあれ？」

「兼一君の恐怖がアパチャイの野生に火をつけたのだろうか……たぶん」

馬の質問に答える秋雨。私の投げられ地蔵が……と言いながらも止める事はしないようだ。

「まあ、あれはあれでよい修行だよ。アパチャイの多彩な技を肌で感じ取れる」

「なるほど、見ることもまた修行ね」

と、どこかずれた考え方をする2人。その間も兼一とアパチャイの修行(?)は続いている。

「あ、あっちいけええ！！」

次の日、学校の放課後を告げる鐘が鳴り響いた。

「だめだ……最近、まるで進歩がない……」

机に突っ伏し、落ち込む兼一。

「そう気を落とすことないですわ、兼一さん、よく頑張ってますもの」

その後ろで兼一を慰める美羽。

「気休めですかあ？」

「……はい」

正直者な美羽は、嘘をつけずに正直に答えた。

「……ちょっと散歩してきます」

兼一は立ち上がり、トボトボと歩き出した。

「……はあ……」

ため息をつきながら歩く兼一。周りは部活をしている生徒や帰宅する生徒で賑わっていた。

「……こんなんで、ボクは強くなってるのかな？」

考えれば考えるほど気持ちはどんどん暗くなっていく。

「はあ……ん？」

ため息をつき、曲がり角を曲がった。すると、そこには……

「よう白浜君、久しぶりだね」

胴着を着た筋肉隆々な男、大門寺がいた。

「……たしか大門寺君だっけ？　ボクになんかよう？」

「この間の礼をしにきたんだよ……勝ち逃げされちゃ俺が困るんだよ」

右側だけを脱ぎ、鍛え上げた右腕を見せる大門寺。

「どうだ？　あれから鍛え上げたこの筋肉は……おめえみたいなモヤシ野郎に負ける気はしねえ」

「うわぁ……」

ムンツと言いながらポーズを決める大門寺にドン引きな兼一。

「おめえに勝てば、ラグナレクに入れてもらえるんだよ……だから」
空手の構えをとる大門寺。1歩踏み出し、腰を回転させ……

「死ねやあああ!!!」

右腕を振るった。

「!!!」

咄嗟に構える兼一だが、ある事に気付いた。

(なんだ……スローモーションみたいだ)

ユルユルとゆっくりに見える右の正拳突き。ギリギリを見極め、ほんの少し右に首を傾ける。

「なあっ!?!」

躲され、驚く大門寺。右腕が伸びきる頃には、兼一は大門寺の左側に立っていた。

「ていつ!?!」

すかさず左足を大門寺の腹に打ち込んだ。

「ごっ!?!……は……」

鈍い音が鳴り、その場で崩れ落ちる大門寺。その光景を見て、兼一は呆然としていた。

「蹴りの威力が前より大違いだ……」

以前は三級挽き肉トロフジエムコノガツセから粗碎でようやく沈んだ大門寺が、1撃で倒れた。

「そうか……なるほど、少しずつだけどボクは……」

倒れている大門寺を無視し、歩き出した兼一は、右手の拳をギョツと握りしめる。

「確実に、進歩している……！」

自身の成長を感じ、笑顔で軽くガッツポーズをした。

BATTLE 21 (後書き)

短くてすみません……今回は繋ぎのお話でした。

新しくポケモンの小説書き始めました。一応ギャグもので、息抜き程度の作品です……

不定期更新ですが、そちらも読んでいただければ幸いです……

それではノシ

INTERVAL 3 (前書き)

いつのまにか50万アクセス突破してたよ……

感謝を込めて書きました。

それでは、どうぞ！

INTERVAL 3

「白浜兼一のお〜」

「お料理教室う〜」

（某キューピットで3分な料理番組のテーマソング）

「はい、始めました！ 第1回白浜兼一のお料理教室です」

「この料理教室は本編とは全然関係ないお話、ぶっちゃけ50万ア
クセス突破記念作品です！ なので飛ばしてくれても構いません！」

「料理は実際に作者が作る料理のレシピです。しかも作者は素人で
す。なのでつつこみどころ満載だと思えますが、まあ、細かいこと
は気にすんな」

「さて、そろそろ始めましょうか！ あ、紹介が遅れました。ボク
は本編主人公、てか原作とかけ離れすぎてもはやオリ主じゃね？
な、白浜兼一です！」

「今日のレシピはあ………」

《ボンゴレ・ビアンコ》

「 です! 」

ワーワーパチパチ

「ボンゴレ・ビアンコはパスタ料理で、アサリを使います」

「それでは材料のご紹介! 」

《材料》

アサリ (適当)

パスタ (適当)

白ワイン (適当)

オリーブオイル (適当)

ニンニク (適当)

赤唐辛子 (適当)

ブラックペッパー (適当)

「 です! 」

「 …… え? 適当が多い? だから細かいことは気にすんな とうか作者は素人と言ったでしょ? 」

「 男の料理なんてこんなもんです …… あ、でも本編のボクはプロ並みの腕という設定です。本編とこの話は一切関係ありませんのであしからず 」

「ではでは始めましょう！」

エプロン装着。柄は黒で真ん中にサングラスをかけ、頬に傷がある可愛いウサギが、ガンつけながらしゃがんでいるものだ。

《漢なら誰かのために強くなれ》

と、ウサギの右に無駄に達筆な字で書かれている。

「準備完了！ まずはアサリですが、2、30分ほど塩水につけ、砂抜きをします」

ボウルに水を入れ、塩を入れる。ざるに入れたアサリをボウルに入れる。

「大体海水に近いように、ということですが、まあ適当に入れときましょう」

「そして冷蔵庫に保存。2、30分待ちましょう」

冷蔵庫を開け、ボウルを入れる。

「ここに2、30分たったアサリを用意します。え？ お約束？ ぼく、よくわからない」

キッチンの下からボウルを取り出す。カメラの死角なので下が見えない。

水を捨て、ざるの中のアサリを流水でガチャガチャと洗う。

「流水でアサリを洗います。次にフライパンを準備します」

ガスコンロの上にフライパンと底が深い鍋がある。

「ついでにパスタも準備します。鍋に水を入れ、沸騰させます。沸騰したら塩を一杯入れます」

「さて、平行してアサリを調理します」

「まず火をつけ、フライパンを熱します」

フライパンから白い煙が出る。

「白い煙が出始めたらオリーブオイルを適当に入れる。そしてニンニク、赤唐辛子を入れます」

「ちなみにニンニクは1欠片をみじん切り、赤唐辛子は輪切りにします」

フライパンを手前の方に斜めにし、オリーブオイルを端にため、そこにニンニクと赤唐辛子をいれる。

「オリーブオイルに香り付けするために、フライパンを斜めにします。そこにニンニクと赤唐辛子を入れます」

「フライパンを斜めにする理由は、広がっていると全体に香り付けがしづらいからだと思います」 合ってるか分からん……

「さて、ニンニクが狐色になったら焦げる前に取り出します」

フライパンからニンニクを取り出す。

「辛いのが嫌な人は一緒に赤唐辛子も取り出してください。今回は入れたままにします」

「アサリを入れまゝす」

からからと音をたてながらフライパンにアサリを入れる。

「軽く馴染ませるようにし、白ワインを入れます」

白ワインをさつと入れる。そして蓋を閉める。

「白ワインで酒蒸しにします。ボンゴレ・ビアンコのビアンコは白ワインの事で、赤ワインを入れるとロツソになります」

火を中火にする。隣の底の深い鍋の水がグツグツと沸騰してきた。

「パスタ用の鍋が沸騰してきたので、パスタを入れます」

パスタ同士がくっつかないように広げるようにパスタを入れる。

「今回使うパスタは8分茹でるタイプなので、1分早い7分で取り出します」

タイマーを7分にセットし、スタート。

「さてさて、そうこうしているうちにアサリがいい感じになってきましたね」

フライパンの蓋をとると、ブワツと湯気が出た。アサリは殻が開き、身が顔を出している。

「火を止めてアサリを皿に取り出します。オリーブオイルのソースはフライパンに残しておいてください」

「アサリはそのまま食べても美味しいですよ」

「そろそろパスタが茹で上がりそうですね。パスタはたまに軽く一周かき混ぜてください」

タイマーが鳴った。

「7分だったのでパスタを取り出します。ザルにパスタを入れ、少しオリーブオイルを入れます」

「オリーブオイルを入れる理由は、くっついたパスタを離れるようにするためです」

ザルにパスタを入れ、オリーブオイルを1かけし、パスタをかき混ぜる。そしてフライパンに火をかける。

「ソースが少し温まってきたらパスタを入れます。軽く和え、パスタの茹で汁を少し入れます」

「いい具合に和えたらアサリを入れます。あまり炒めすぎるとパスタが固くなるので注意してください」

「アサリもかき混ぜすぎると身が取れたり、殻がかけたりするので

軽くにしましょう」

弱火でパスタとアサリを炒め、少しブラックペッパーを振りかける。そして火を止め、皿に盛り付ける。

「あとはパスタを盛り付け……出来た！」

「ボンゴレ・ビアンコの完成です！」

ワーワーパチパチ

「お好みでパセリを散らしてもいいですね」

「さて、お別れの時間が来ました。今回のボンゴレ・ビアンコはいかがでしたか？ この料理は作者が初めて作ったパスタ料理だったります」

「皆さんも試しに作ってみてはいかがでしょう？ このレシピで合ってるかは分かりませんが、自分で調べるなり本を読むなりし

てください……」

「それではまた会いましょう！ さようなら」

（ 某キューピットで3分な（以下略）（

INTERVAL3 (後書き)

ポングレ・ビアンコの作り方は本当に合ってるかは分かりません)
汗)

作者は料理初心者で、最近始めたばかりです。
なにかいいレシピがあれば教えてください！

ではでは～

BATTLE22 (前書き)

あけましておめでとうございます！

更新停止して丸々半年…… 大変申し訳ありませんでした。

言い訳させていただと、実習だったりテストだったり、就活だったりで色々と忙しく、中々執筆できませんでした。

しかし、就職も無事に決まったので、今年からは更新を再開したいと思います。

今まで待たせてしまい、申し訳ありません…… しかし、意地でもこの作品は完結させてみせます！

ですので、どうか今年もよろしく願います。

…… それでは、どうぞ！

BATTLE 2

晴れた空……白い雲……そしていつもの土煙の匂い……。

そんな朝の河川敷、ファイトという掛け声と共にランニングをしている女子達……。

その横を、風を切るように走る一人の男がいた。

「はあ、はあ、はあ……！」

その名を、白浜兼一。背中に達筆な文字で『新年』とプリントされた黒いTシャツに、下に白い胴着を穿いている兼一は、タイヤを引きながら走っていた。

「おそい！ もっと早く……！」

そして、そのタイヤにはある一人の男が乗っている。

彼の名は岬越寺秋雨。武術の達人であり、哲学する柔術家と呼ばれる人物だ。

「くすくす……」

「こんにちはーっ！」

ランニングをしていた女子達は、通り際に笑いながら挨拶をしていく。

「はあ、はあ……ども！」

そんな女子達に挨拶を返して走り去る兼一。

「ほら、よそ見をしない!!」

「あ、あだっ!?!」

そして兼一を注意し、持っていた鞭で軽く叩く秋雨。

「はあ、はあ、はあ、はあ……!!」

そのまま兼一は河川敷を走り続けていった……。

場所は変わって公園。兼一は公園にある水のみ場の蛇口で、頭を洗っていた。

「……ぶはあ!」

勢いよく頭を上げて首を振って水を飛ばす。

「そつえば岬越寺先生……」

「ん? なんだい?」

ふと思いついたように秋雨に質問する兼一。

「岬越寺先生って、アパチャイさんや逆鬼先生みたくムキムキじゃないですよね」

「むっ、まあ……確かにそうだが……」

そう言って秋雨は顎を手で撫でる。

「まあ達人になればなる程、力なしでも技でさばけるしね。それに、スマートだろ？」

渋く笑いながら歩き出した秋雨。その背中を見つつ、タイヤを持ちながら兼一は歩いた。

「（……この人のことだから、どうせ滅法強いんだろうけど）」

兼一は秋雨の背中を見ながら思う。

背丈は170cmほど、線は細くムキムキとはほど遠いであろう筋肉。

「（実際、どんな戦い方をするんだろう……この細身からは、想像もつかないよ……）」

そんな疑問を持ちつつ、兼一は梁山泊に戻った。

次の日。

「いやあ、すまんね兼一君。生薬の買いつけに付き合わせしまって」

「いやいや、大丈夫ですよ」

今日は日曜日、時刻は昼。秋雨と兼一は、背中に大きなリュックを背負いながら帰路についていた。

「生薬の買いつけは普段、剣星と来るんだが……なんか今日は大事

な本の限定発売日だとかなんとかでね」

秋雨が言っている剣星とは、秋雨が住んでいる武術の達人が集う『梁山泊』にいる中国拳法の達人……あらゆる中国拳法の達人と呼ばれる人物、馬剣星の事だ。

「（まあ、エロ本だろうな……）」

兼一が思っている事は、おそらく……いや、確実に正解だろう。なぜなら、馬剣星を一言で表すと、ずばり……エロだからだ。

「しかしこの距離を歩いて往復なんて……これも修行の一環ですか？」

それもそのはず、兼一達が歩いている距離はバスでなら20分はかかるであろう物であった。

「いや、バス代節約だ」

「ア、ソウデスカ……」

はつきりと節約という答えた秋雨に対し、思わず棒読みで答えってしまう兼一。

「……ん？」

ふと秋雨は何かに気づいた。

「やめてよ！ 人呼ぶわよ！！」

「ちょっと聞きてえ事があんだよ！」

視線の先には3人の男に囲まれた2人の女子。

「あ、泉さんと姫野さんだ！」

男達に絡まれていたのは眼鏡に三つ編みの少女、泉優香。そして長髪にカチューシャ、肩に長物の竹刀袋をかけた少女、姫野真琴。

2人は兼一と同じクラスの生徒だ。

「三つ編みで眼鏡をかけててよう……いるんだろ？ おめーらの学校に胸のでかいおでこ娘で……」

「おじさん達、どーしてもその娘にお礼がしたくてねっつ!!！」

ヤクザであろう2人が泉達に話しかける。

「わ、私胸大きくないですよ!!！」

「やめてよ!!！」

泉はおどおどしながら反論し、姫野は片手を押さえられながら抵抗していた。

「……あっ、あのヤクザ達、ずっと前に美羽さんと僕にのされた連中だ……」

以前、美羽……梁山泊に住む兼一の同じクラスで友達の風林寺美羽と兼一にやられたヤクザ達が、泉達に絡んでいた。

「……ん？ おい、あの小僧だ!!！」

ヤクザの1人、右目の横に縦の傷がある男が兼一に気づいた。

「し、白浜君!?!」

「白浜っ!?!」

そして泉達も兼一に気づいて声を上げる。

「泉さん、姫野さん! 今のうちに逃げて!?!」

「え!?! で、でも……」

「……分かった! 行きましよう!?!」

「え、あ、ええ!?!」

兼一の指示に従って泉の手を引きながら逃げる姫野。泉は手を引かれながら、後ろ髪を引かれる思いで振り向きつつ逃げていった。ヤクザ達は逃げる泉達を追うことはせず、兼一と秋雨に近づいてきた。

「どきなヒゲ! そのガキに用がある!」

傷がある男は、秋雨の右肩に手を置く。

「……あー、事情はくわしく知らんが……」

目を瞑り、肩に置かれた手を掴む秋雨。

「うちの弟子が何か粗相でも？」

その瞬間、目を見開き傷の男を睨む秋雨。

「……………うっ！！」

何か背が凍るような感覚が傷の男に走り、反射的に手を勢いよく離す。

「くっ！！　おい、みんな！　気いつける！！　こゝ、こゝいつできるぞー！！」

と、仲間のヤクザ達に注意する傷の男……………そこで仲間の1人である角刈りの男が何かに気づいた。

「あ、兄き……………て、手えー！！」

「あん？　な、なにいゝっ！？」

ふと秋雨に握られた右手を見ると、手首の骨がはずれ、力なく下を向いて揺れていた。

「ギヤアアアアアアアー！！」

「ひ、ひいいい！？」

気づいた傷の男は、手首をプラプラさせながら叫び、仲間の男はそれに怯えて情けない声を上げた。

「おっとすまんすまん。つい癖ではずしてしまった」

「(どことなくせじゃ?)」

秋雨の言った事に心の中でつつこむ兼一。

その瞬間、傷の男の背後に回った秋雨は、一瞬で手首の骨をはめた。

「ひっ!? ひいい……いつの間に後ろにっ!?」

「ほら、これではまった」

傷の男は後ろにいた秋雨に驚き、後ろに下がる。

「化け物だっ!? こいつも化け物だ!! てめーら、ぶ、武器だ!! それに先生を呼べ!!」

「失敬な、なあ兼一君?」

「は、ははは……」

傷の男の言葉にちょっと怒りながら兼一に同意を求める秋雨。

兼一は肯定も否定もせず笑って誤魔化した。

「みんな出るっ!!」

その言葉と共に近くにあったワゴン車からぞろぞろと出てくるヤクザ達。

「ククク……このヒゲ親父はあの、おでこ娘の父親にちげーねー!!
! 先生早く!!」

「やれやれ……」

秋雨は面倒だと言わんばかりにため息をつく。
そして、ワゴン車から1人の男が出てきた。

「先生！！ とりあえずあのヒゲをぶっ潰してくれ！！」

先生と呼ばれた男…… 2mはあるであろう巨体にそれに見合う筋
肉。

白いスーツにワイシャツ、赤いネクタイ。そして、顔の半分を覆
い隠す豹柄の覆面をかぶった男が現れた。

「でか……」

「いやいや大きいね〜君は……」

スーツのズボンに手を突っ込み、先生と呼ばれた大男は、無言で
秋雨を見下ろした。

「なんだよ、わざわざオレを呼んで……片づけてほしーってのはこ
の優男か？」

秋雨を親指で指し、傷の男に振り向く大男。

「あー……でくの坊君、プロレスラーくずれだよな？ 誤解しない
でくれたまえ」

「……あん？」

秋雨の言葉に睨み付ける大男。

「別に私は君達をいじめるつもりはないんだよ……ちょっとした手
違いだね」

「……………」

大男は黙って話を聞く。

「家に帰りたまえ、私も家に帰る途中なだけだ」

「……………っ!!」

とつとつ堪忍袋の緒が切れた大男は、横にあった道路標識を握り、
足で押さえつつ力任せに標識を曲げた。

「おおっ!!」

「さすが先生だ!!」

大男のパフォーマンスに沸くヤクザ達。

「へえ……………」

兼一は大男のパワーに感心した。

「なんて事するんだ？ 公共物は国民の血税で出来ているのだよ！」

秋雨は大男に説教をする。その横では標識の頭がくわんくわんと
揺れていた。

「どうも怒らせてしまったようだねえ。私は争いを好まないほづだ。気にさわったのなら訂正するよ」

「ふん、おりこうだなヒゲ！」

秋雨の言葉に偉そうに返す大男。

「……………」

兼一は黙ってその場を見守る。

「『いじめる気がない』というのは訂正だ……………」

おもむろに人指し指を標識に当てた秋雨。

「……………なっ!?!」

「はあああ!?!」

そして同時に兼一と大男が驚いた。それもそのはず、人指し指で押された標識が……………。

「私はヤクザが嫌いだね、実は少しだけ……………いじめてやろうかなーっと思ってるんだ」

勢いよく標識が曲がり、元に戻っていたからだ。

そして、秋雨はにやりと笑った。

……………まるで悪魔のように。

BATTLE22 (後書き)

読んでいただきありがとうございます！

感想、アドバイスなどがありましたら、是非お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8788s/>

戦うコックさんの弟子ケンイチ

2012年1月1日02時48分発行